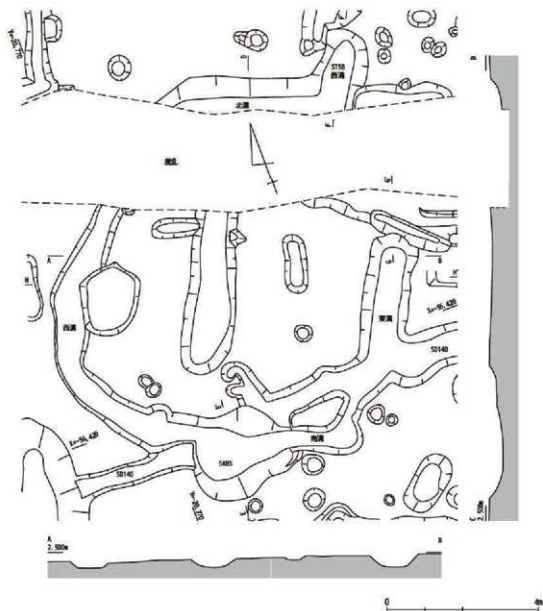


第68図 ST18遺物出土状況図(縮尺1/20)



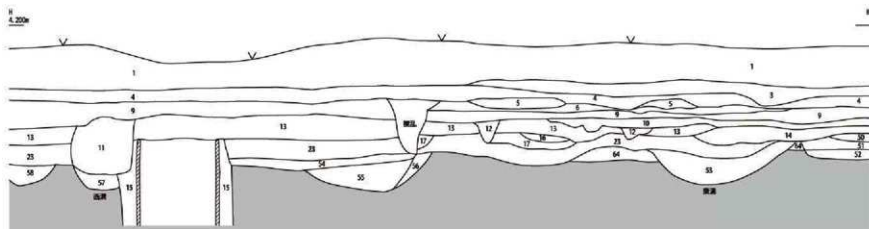
第69図 ST19全体図(縮尺1/100)

ST20 (第71図) II区G・H18・19グリッド、墓城南半の西辺に位置し、ST6に南接する。不整形な平面形で、墳丘長軸7.1m、短軸6.4mを測る。長軸方向は $N6^{\circ}E$ である。四辺で周溝を認めたが、西辺を除き部分的な検出にとどまる。この形状が原形を反映したものなのか、後世の削平によるものかは判断できない。西溝で弥生時代中期後葉に属す壺の口縁部破片(第225図17)が出土した。

埋葬施設は確認していないが、墳丘北西および南西に位置する2基の土坑に可能性を認めうる。造営時期については、出土土器が零細であるため、積極的に言及できない。

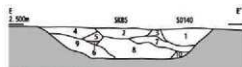
ST21 (第72・73図) IV区A・B19・20グリッド、墓城中央付近の東辺に位置し、ST17に北接、ST22に南接する。正方形に近い平面形を呈し、墳丘長軸9.2m、短軸8.7mを測る。長軸方向は $N21^{\circ}E$ である。周溝は北・西溝間、東・南溝間の2箇所途切れる。北溝はST22南溝を切っており、南溝はST17北溝に切られている。遺物は東溝で弥生時代中期後葉に属す壺の口縁部破片(第225図18)が

第70図 ST19土層断面図(縮尺1/50)



- | | | |
|-----------------------------|-----------------------------|---------------------------|
| 1 黄褐色粘質土、炭化物少量、細一中礫少量 | 11 褐色粘質土、細砂少量 | 51 黒褐色粘質土、炭化物少量 |
| 2 褐色粘質土、中礫中量 | 13 灰黄色粘質土、細砂中量 | 52 褐色粘質土、炭化物中量 |
| 3 黄褐色粘質土、細砂少量、炭化物少量 | 14 褐色粘質土、灰黄色粘土、砂ブロック中量 | 54 黒褐色粘質土 |
| 4 灰黄色粘質土、炭化物少量、細一中礫少量 | 15 褐色粘質土、黄褐色粘土中量 | 55 褐色粘質土 |
| 5 褐色粘質土、細砂少量 | 16 褐色粘質土、白色粘土ブロック少量 | 56 褐色粘質土、炭化物、黒褐色粘土、白色粘土少量 |
| 6 褐色粘質土、細砂少量 | 17 灰黄色粘質土 | 57 黒褐色粘質土 |
| 9 灰黄色粘質土、炭化物少量、細一中礫少量、白色石少量 | 18 褐色粘質土、細砂中量 | 58 褐色粘質土、炭化物少量 |
| 10 黄褐色粘質土、灰黄色粘土中量 | 50 黒褐色粘質土、黒褐色粘土、灰黄色粘土ブロック中量 | |

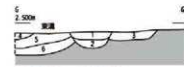
*上層番号はII区土層割取図の通り番号



- | |
|-----------------------------|
| 1 灰黄色粘質土、炭化物少量 |
| 2 褐色粘質土、粘土ブロック |
| 3 褐色粘質土、粘土ブロック少量 |
| 4 褐色粘質土、炭化物、白色粘土中量、粘土ブロック少量 |
| 5 褐色粘質土 |
| 6 褐色粘質土 |
| 7 黒褐色粘質土、炭化物少量 |
| 8 褐色粘質土、炭化物中量 |
| 9 褐色粘質土、炭化物 |
| 10 黒褐色粘質土、褐色粘土中量 |

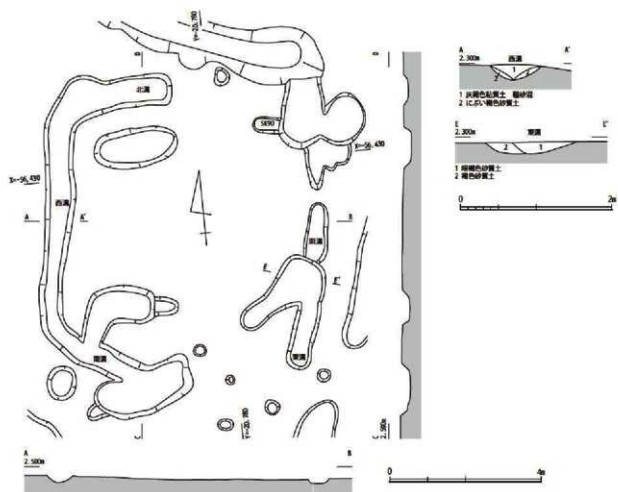


- | |
|---------------|
| 1 褐色粘土 |
| 2 褐色粘土 |
| 3 褐色粘土 |
| 4 褐色粘土、褐色粘土少量 |
| 5 褐色粘土 |



- | | |
|----------|------------------|
| 1 灰黄色粘質土 | 4 褐色粘質土 |
| 2 黒褐色粘質土 | 5 褐色粘質土 |
| 3 褐色粘質土 | 6 褐色粘質土、褐色粘土ブロック |





第71図 ST20実測図(縮尺1/100・1/50)

土した。また、東溝北半では拳～人頭大の亜角礫が溝に沿って列状に集積していた。

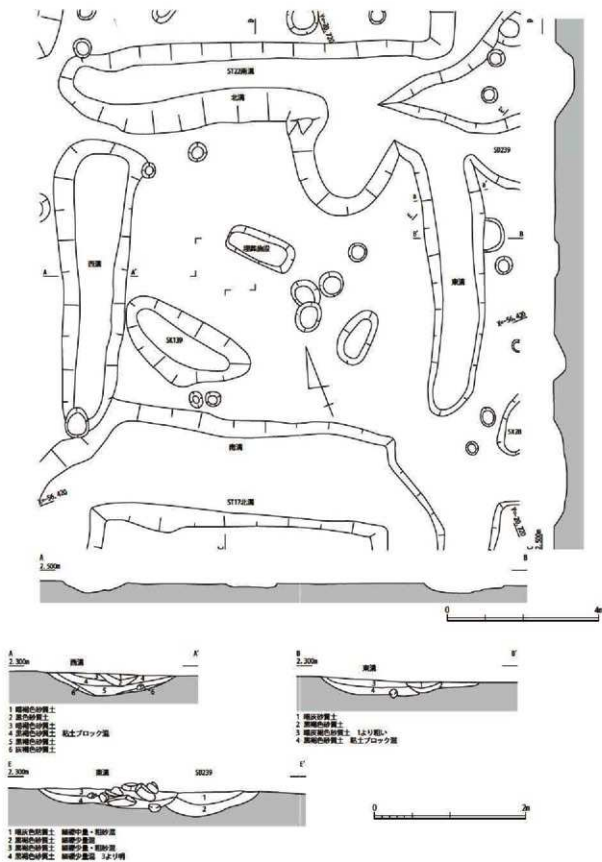
埋葬施設は1基確認した。墳丘中央付近に位置し、長軸は墳丘の各辺に斜交している。木棺の痕跡は認められなかった。

造営時期については出土土器および切り合い関係から弥生時代中期後葉と考えている。

ST22(第74～77図) IV区A・B20～22グリッド、墓城北半の東辺に位置し、ST21に北接、ST23に南接する。平面形は長方形を呈し、墳丘長軸13.8m、短軸11.4mを測る。長軸方向はN22°Eである。周溝は東・南溝間を除く3箇所で途切れ、西溝はST23東～南溝、南溝はST21北溝に切られる。周溝からは弥生時代中期後葉の土器(第226図1～12)が出土した。また、西溝で拳～人頭大の亜角礫が溝に沿って列状に集積していた。そのほか、南溝でサヌカイト製の大型剥片(第279図13)が出土している。

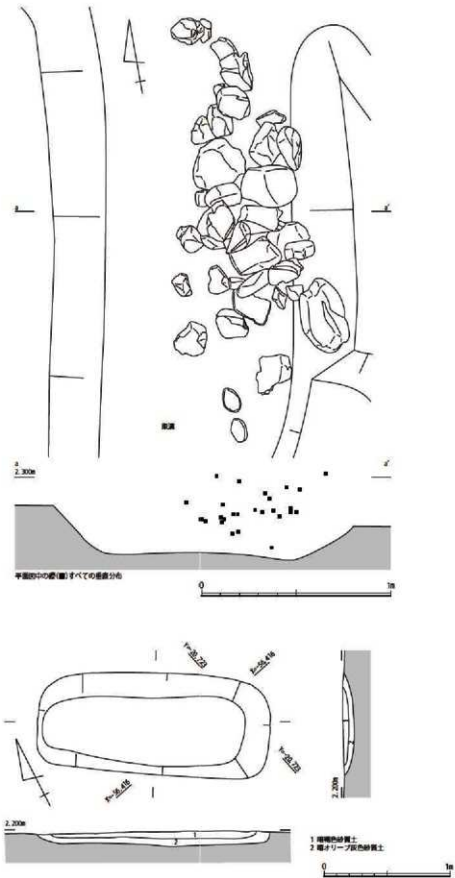
埋葬施設は7基確認した。墳丘中央部に第1・2埋葬施設がL字状に切り合って位置し、その周囲にはほかの埋葬施設が分布している。第1埋葬施設では木棺の一部と考えられる板材が出土し、樹種はコウヤマキと同定された。ほかに検出した木棺はすべてスギ材であり、本遺跡では特殊な事例といえる。

造営時期については出土土器から弥生時代中期後葉と考えている。



第72図 ST21全体・土層断面図(縮尺1/100・1/50)

第1節 遺構



第73図 ST21葬出土状況・埋葬施設実測図(縮尺1/20・1/30)

ST23 (第78・79図) IV区A・B22グリッドに位置し、ST22に北接、ST60に東接する。正方形に近い平面形を呈し、墳丘長軸6.6m、短軸6.3mを測る。長軸方向はN31°Eである。周溝は北・西溝間の1箇所まで途切れる。西溝がST60東溝を、東・南溝がST22西溝をそれぞれ切っている。周溝からは弥生時代中期後葉の土器(第226図13~15)が出土した。なかでも15の小型壺は南溝の底面直上で出土し、その上層では、拳~人頭大の亜角礫が墳丘沿いに集積していた。埋葬施設は確認できなかった。

造営時期については出土土器から弥生時代中期後葉と考えている。

ST24 (第80・81図) IV区B・C22・23グリッド、墓城北半の中央付近に位置する。平面形は長方形を呈し、墳丘長軸7.3m、短軸5.7mを測る。長軸方向はN42°Eである。周溝は全周し、ST60周溝を切つてその北東隅に内接している。周溝からは弥生時代中期後葉および終末期の土器(第226図16~22)が出土した。また、北溝の東端では拳~人頭大の亜角礫が集積していた。

埋葬施設は墳丘上で3基確認したが、後述するようにST60に帰属する可能性が高いと考えている。

造営時期について土器の出土状況から判断するのは難しいが、遺存する周溝が細く浅いことから、どちらかといえば弥生時代終末期に帰属する可能性が高いように思われる。該期の土器に二重口縁蓋(16)がみられることも示唆的である。

ST25 (第82図) IV区A22・23グリッド、墓城北半の東側に位置し、ST26に西接、ST61に東接する。平面形は不整形でむしろ円形に近く、墳丘長軸8.3m、短軸7.8mを測る。周溝は西・南溝間を除く3箇所まで途切れる。北溝はST61北溝に、東溝はST26西溝に切られている。埋葬施設は確認できなかった。

造営時期については切り合い関係から弥生時代後期を下らないと考えている。

ST26 (第83・84図) IV区Z・A23グリッド、墓城北半の東辺に位置し、ST25に東接、ST27に南接する。平面形は長方形を呈し、墳丘長軸7m、短軸6mを測る。長軸はほぼ南北である。周溝は四隅で途切れ、西溝はST25東溝を切り、北溝はST27南溝に切られている。周溝からは弥生時代中期後葉の土器(第227図1・2)が出土した。2の短頸壺は完形に近く、西溝の墳丘寄り出土している。

埋葬施設は墳丘中央で1基確認した。長軸は墳丘短軸に平行する。木棺の痕跡は認められない。

造営時期については周溝出土土器から弥生時代中期後葉と考えている。

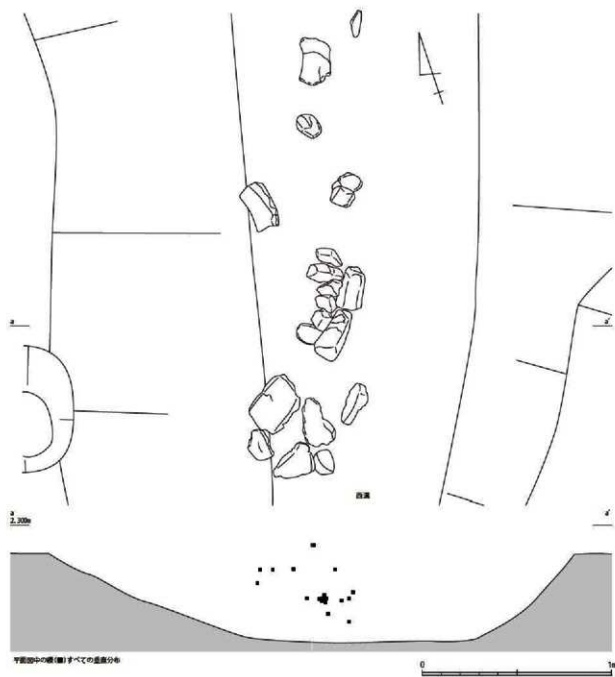
ST27 (第85図) IV区Z・A23~25グリッド、墓城北半の東辺に位置し、ST26に北接、ST29・44に南接する。平面形は長方形を呈し、墳丘長軸11.4m、短軸9.1mを測る。長軸方向はN22°Eである。周溝は3箇所まで途切れているが、北・西溝間はST29南溝に切られて不明なため、四隅切れの可能性もある。また、北溝はST44南溝に、西溝はST28北~東溝に切られている。一方、南溝はST26北溝を切っている。東溝で時期不明の土器底部(第227図3)が出土した。埋葬施設は確認できなかった。

造営時期については切り合い関係から弥生時代中期後葉~後期の間に位置付けられよう。

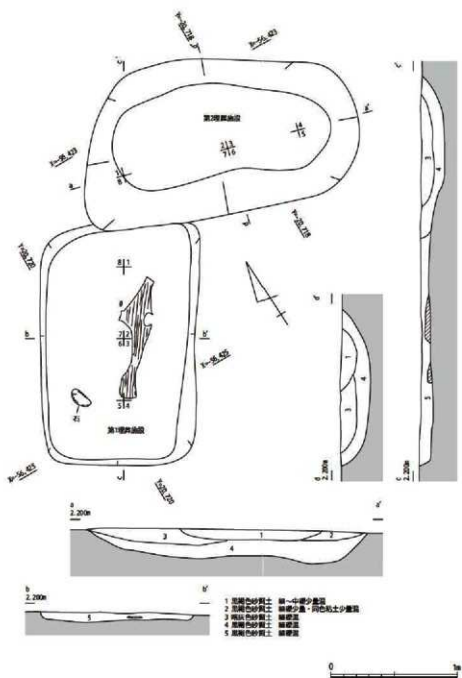
ST28 (第86・87図) IV区A・B23・24グリッドに位置し、ST27に西接する。平面形は正方形に近く、墳丘長軸8.1m、短軸7.5mを測る。長軸方向はN10°Eである。周溝は西~南溝がSD213・215と切り合い、平面的に捉えにくいのが、両溝を切っていることが複数の断面で確認でき、全周するものと判断できる。また、北~東溝はST27西溝を切っている。周溝からは弥生時代後期の土器(第227図4~6)が出土している。4の把手付無頸壺は完形であり、南溝の墳丘寄り出土した。ほかの遺物としては、東溝で磨製石斧の基部(第282図1)が出土している。

埋葬施設は確認していないが、墳丘で検出した不整形な土坑にその可能性を認めうる。

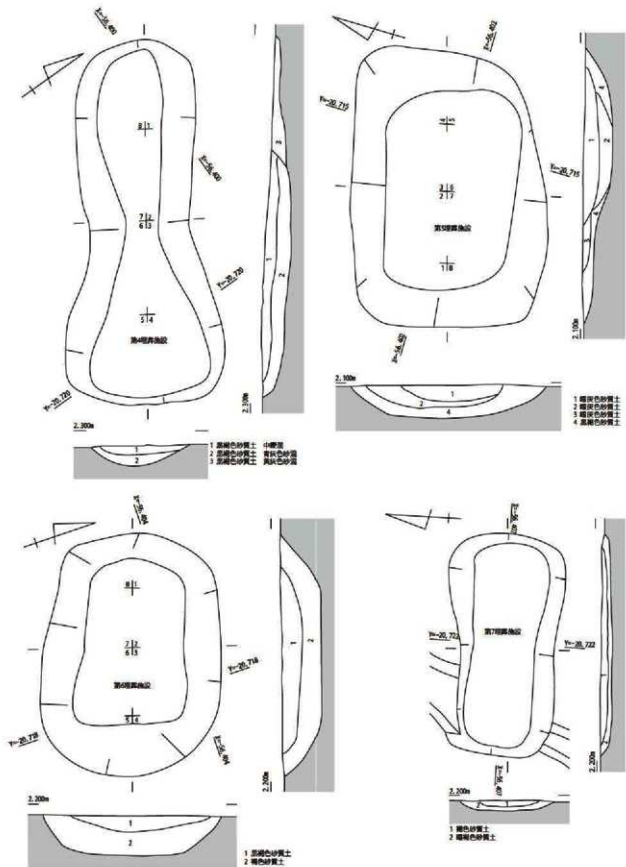
造営時期については周溝出土土器から弥生時代後期と考えている。



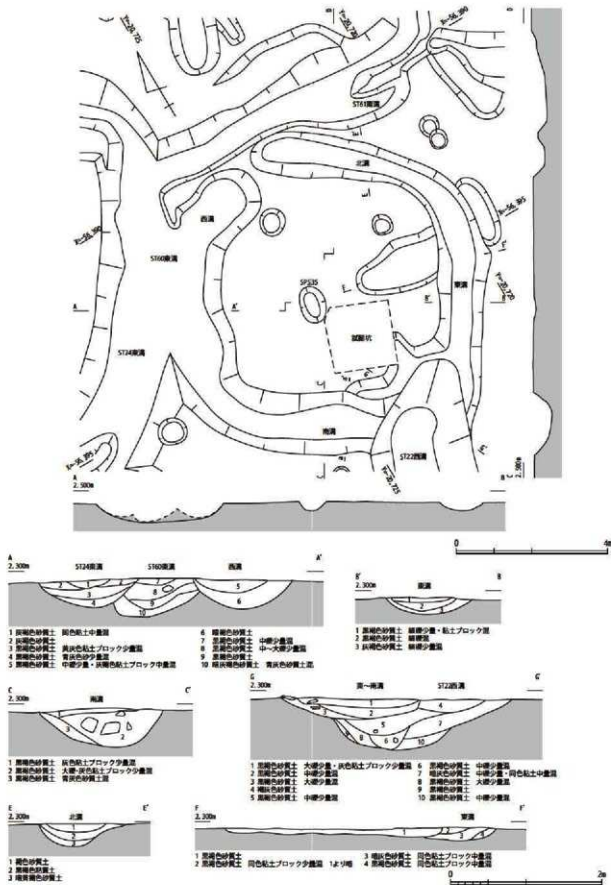
第75図 ST22発出土状況図(縮尺1/20)



第76図 ST22埋葬施設実測図(縮尺1/30)

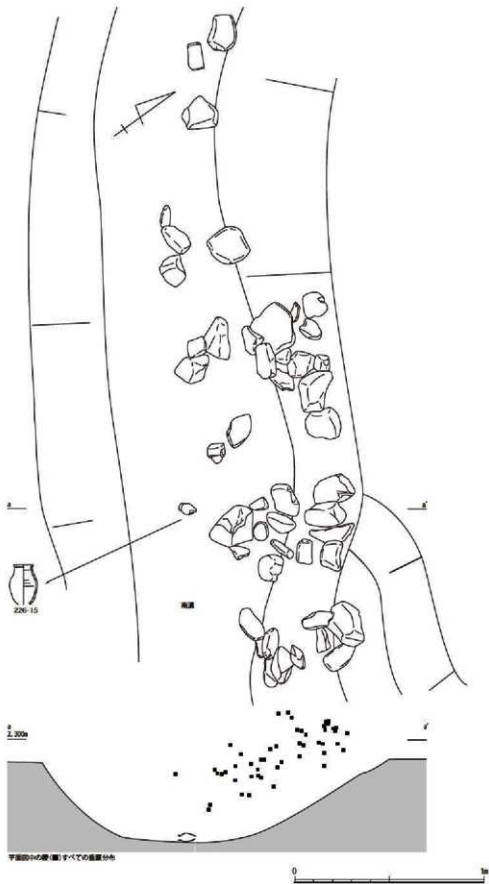


第77図 ST22埋葬施設実測図(縮尺1/30)

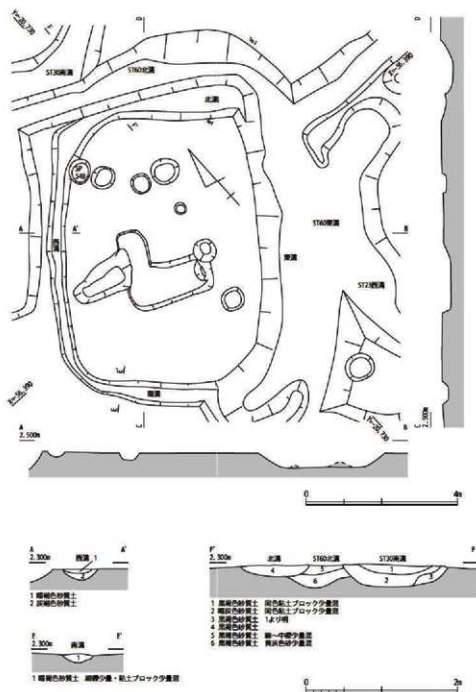


第78図 ST23全体・土層断面図(縮尺1/100・1/50)

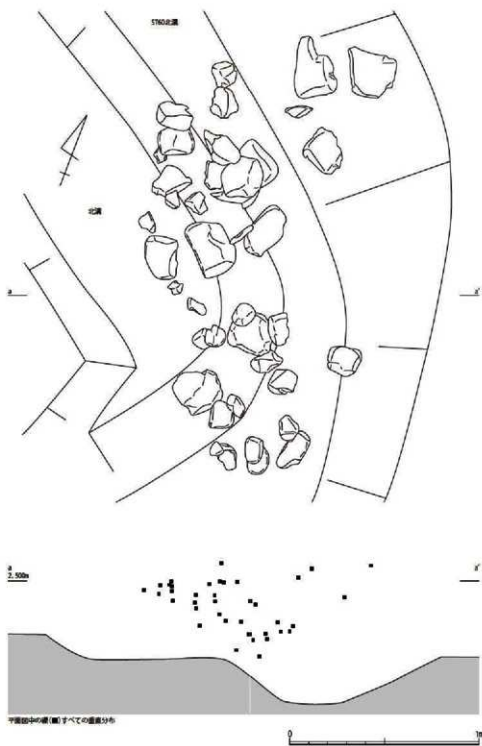
第1節 遺構



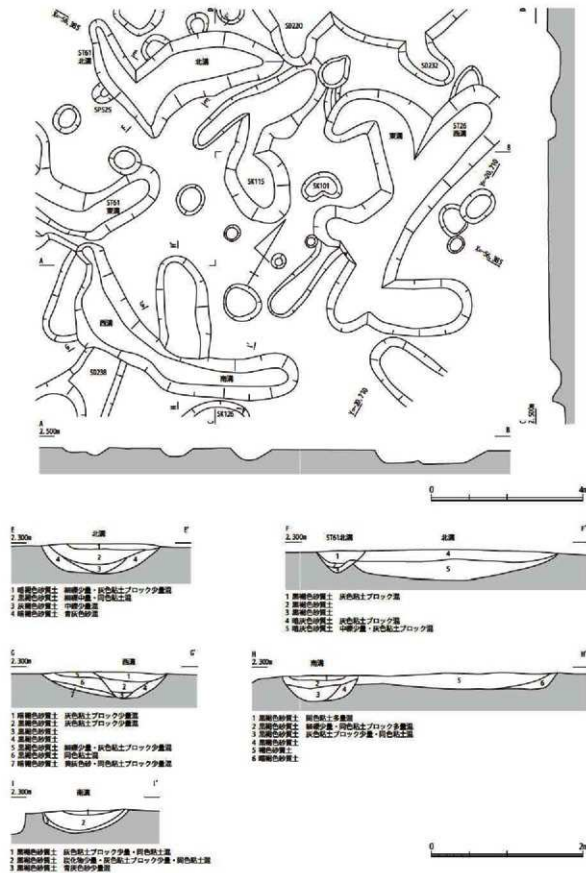
第79図 ST23竈・遺物出土状況図(縮尺1/20)



第80図 ST24全体・土層断面図(縮尺1/100・1/50)

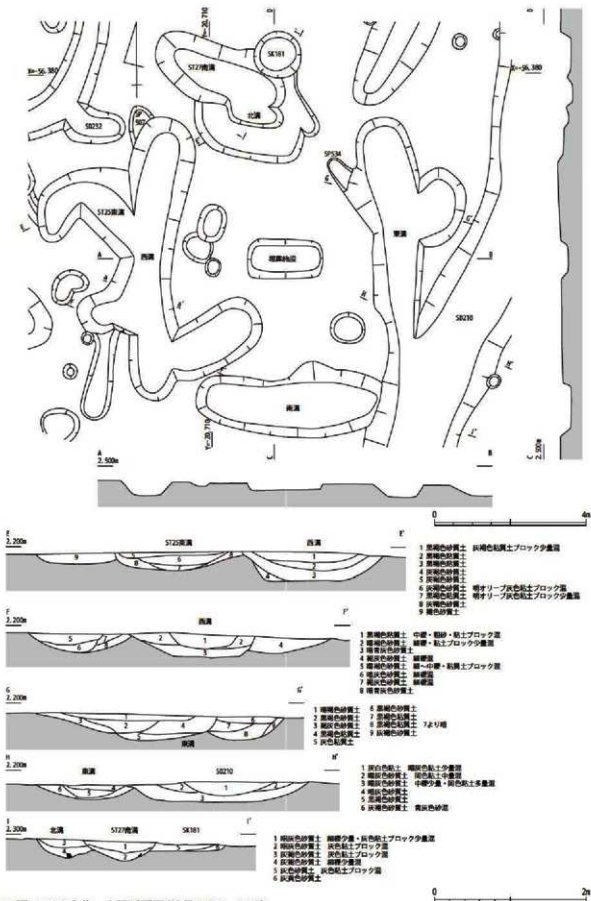


第81図 ST24露出土状況図(縮尺1/20)

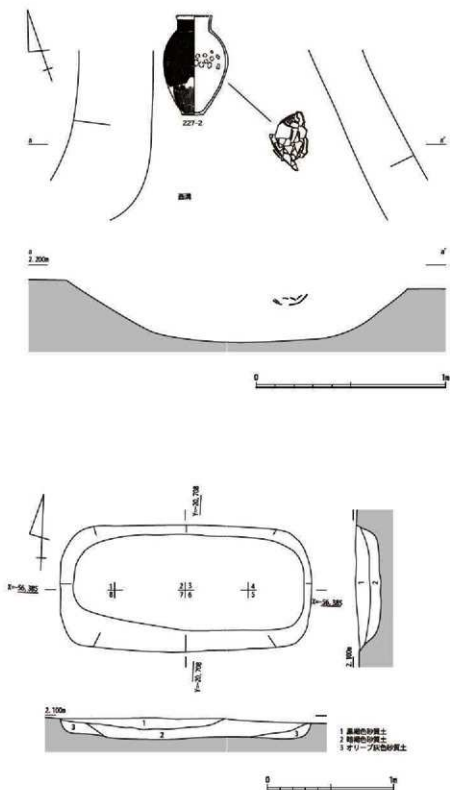


第82図 ST25実測図(縮尺1/100・1/50)

第1節 遺構

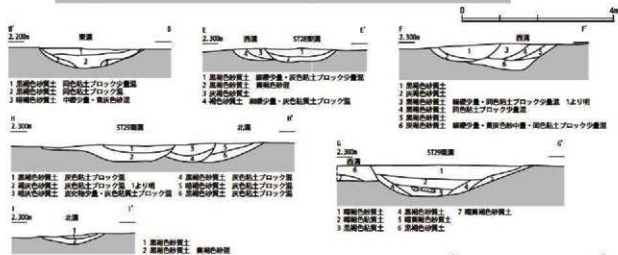
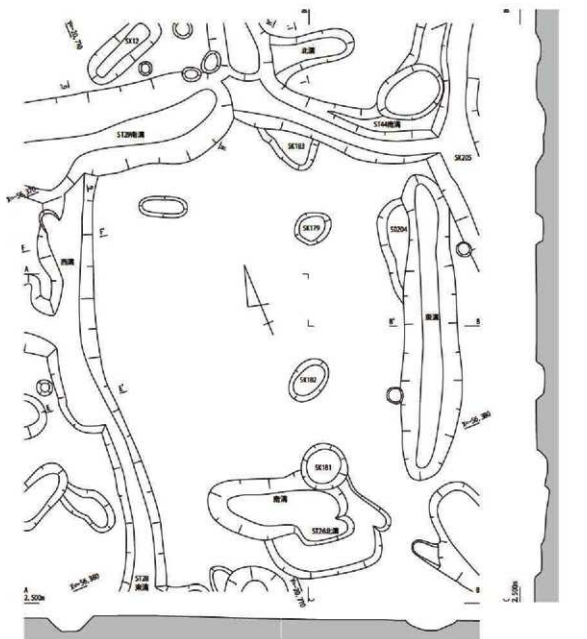


第83図 ST26全体・土層断面図(縮尺1/100・1/50)

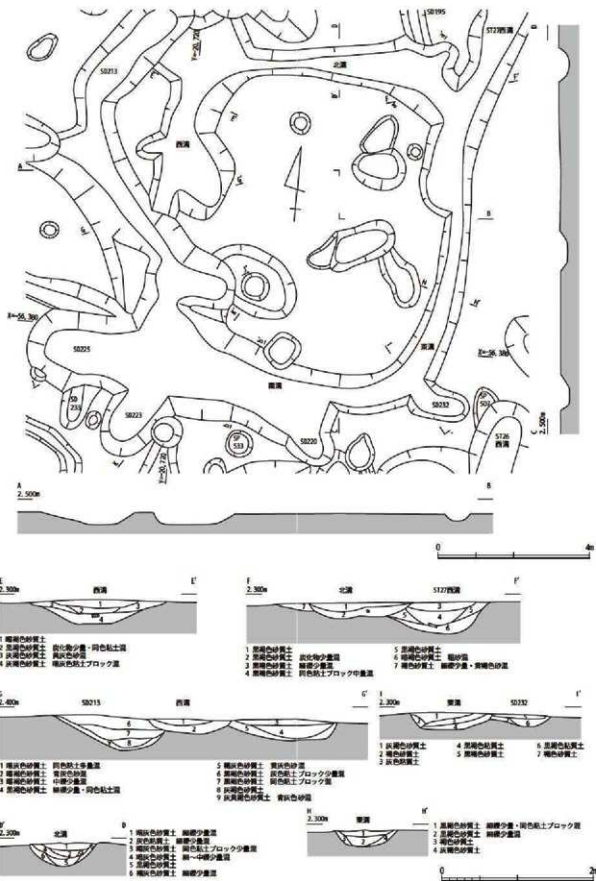


第84図 ST26遺物出土状況・埋葬施設実測図(縮尺1/20・1/30)

第1節 遺構

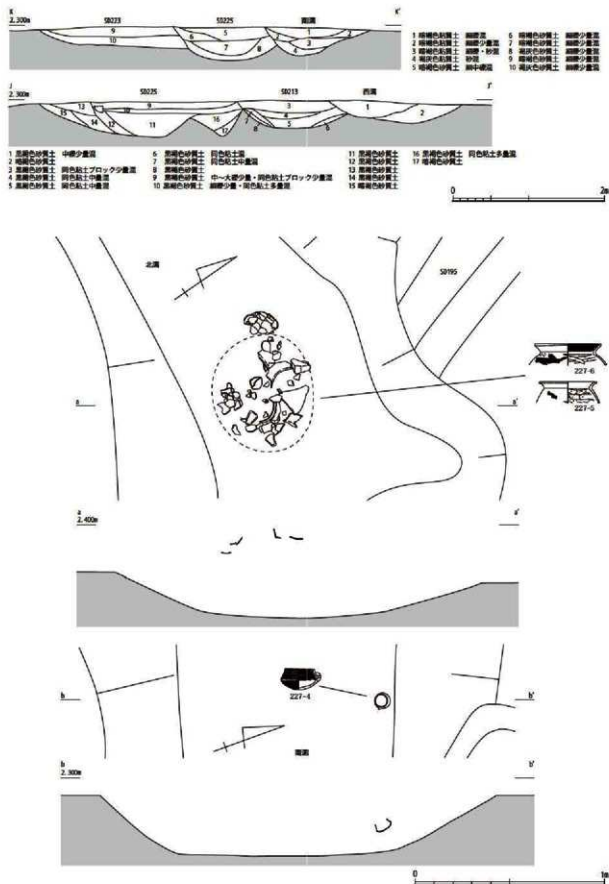


第85図 ST27実測図(縮尺1/100・1/50)



第86図 ST28全体・土層断面図(縮尺1/100・1/50)

第1節 遺構



第87図 ST28土層断面・遺物出土状況図(縮尺1/50・1/20)

ST29 (第88~90図) IV・VI区Z・A25グリッド、墓城北端に位置する。四辺で溝を検出したが、東辺の溝は北端が北東方向へ延びており、本周溝墓を区画する溝としては不自然である。東に接続するST44の周溝とするにも同様に疑問が残る。したがって、この溝については便宜的にここで扱うが、遺構名は遺物取り上げ時に暫定的に用いていたSD321としておきたい。この溝からは弥生時代中期後葉の土器(第259図8~18)が多数出土した。形状を保っていた個体が多く、焼成後穿孔をもつものも複数認められる。一方、南溝では後期の壺(第227図7)が出土している。

埋葬施設は1基を認めた。墳丘南端では南溝に接し、長軸は墳丘に斜交している。

造営時期については、SD321の位置付け次第で弥生時代中期後葉あるいは後期に求められよう。

ST30 (第91図) IV区B・C23・24グリッドに位置し、ST35に東接、ST60に北接する。平面形は不整形で、墳丘長軸8.9m、短軸8.5mを測る。長軸はN45°Wである。周溝は西・南溝間の1箇所まで途切れる。南溝はST60北溝を切っており、北~西溝はST35北~西溝に切られている。埋葬施設は確認できなかった。

造営時期については切り合い関係から弥生時代終末期以前に求められる。

ST31 (第92図) IV区A25、B・C25・26グリッド、墓城北辺に位置し、ST36に東接する。平面形は長方形を呈し、墳丘長軸10.1m、短軸8.3mを測る。長軸方向はN37°Wである。周溝は検出範囲においては途切れていないが、SD256によって破壊されている北隅の形状は不明である。西溝はST36北・東溝を、南溝はST45西溝を切っている。遺物は東溝から弥生時代中期後葉とみられる甕の底部(第227図8)が出土している。埋葬施設は明確でないが、墳丘では不整形な土坑が複数認められる。

造営時期について、遺物や切り合い関係からは積極的に行き及べない。

ST32 (第93・94図) IV・VII区C・D19~21グリッド、墓城中央付近に位置し、ST33に南接する。平面形は長方形を呈し、墳丘長軸11.1m、短軸8.8mを測る。長軸方向はN40°Eである。周溝は北隅が溝の切り合いにより平面上明瞭でないが、土層断面の観察から四隅で途切れる形状とみている。西溝はST33東溝に切られている。周溝からは弥生時代中期後葉の土器(第228図)が多数出土した。東溝では、ほぼ完形に復元できる北陸系の甕(7)がみられる。

埋葬施設は明確でないが、墳丘で検出した土坑のなかにその可能性を認めうる。

造営時期については周溝出土土器から弥生時代中期後葉と考えている。

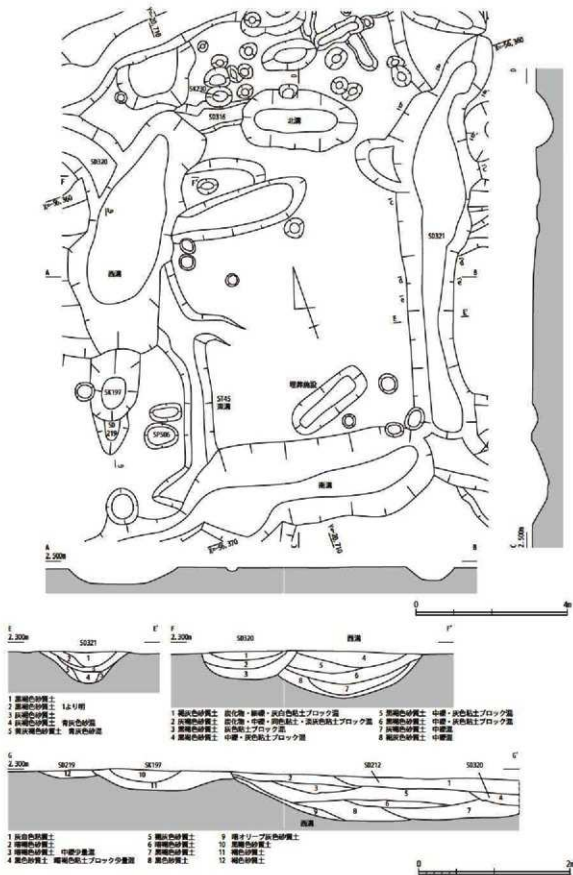
ST33 (第95~98図) IV区C・D20~22グリッドに位置し、ST32に北接する。平面形は長方形を呈し、墳丘長軸14.2m、短軸10.0mを測る。長軸方向はN50°Eである。周溝は東・南溝間を除く3箇所まで途切れる。北溝と西溝がST34東・南溝にそれぞれ切れ、東溝はST32西溝を切っている。周溝からは弥生時代中期後葉の土器(第229図)が多数出土した。

埋葬施設は2基を認めた。墳丘の南隅近くに並んで位置し、長軸は墳丘に斜交している。2基の長軸方向にも若干のずれがある。

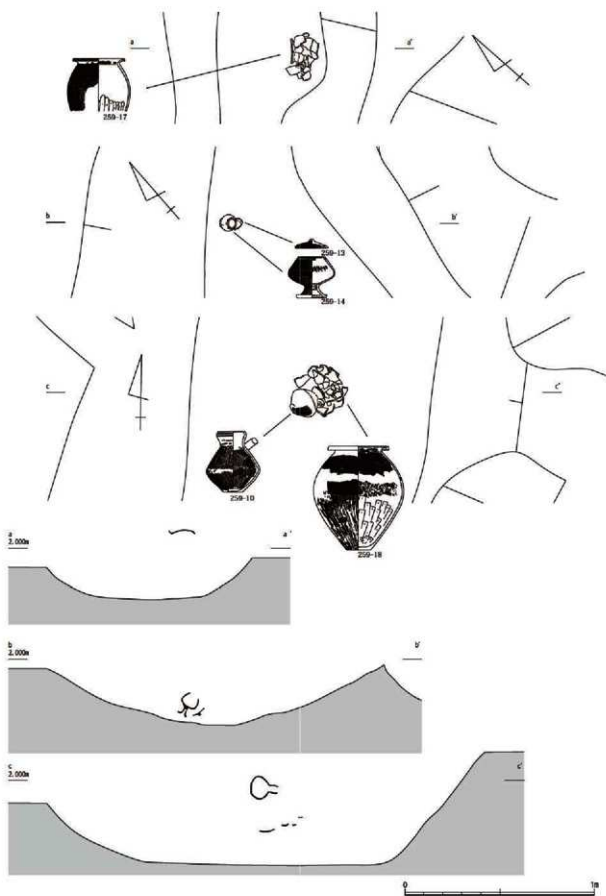
造営時期については周溝出土土器から弥生時代中期後葉と考えている。

ST34 (第99図) IV区C・D22グリッドに位置し、ST33の北隅に大きく重なる。西辺を除く三辺で周溝を検出した。北・南溝間の墳丘長で5.8mを測り、その方位はN18°Eである。周溝はいずれも完結した溝であり、東溝と南溝がST33北・西溝をそれぞれ切っている。東溝で弥生時代中期後葉の壺(第230図1)が完形を保って出土した。埋葬施設は確認できなかった。

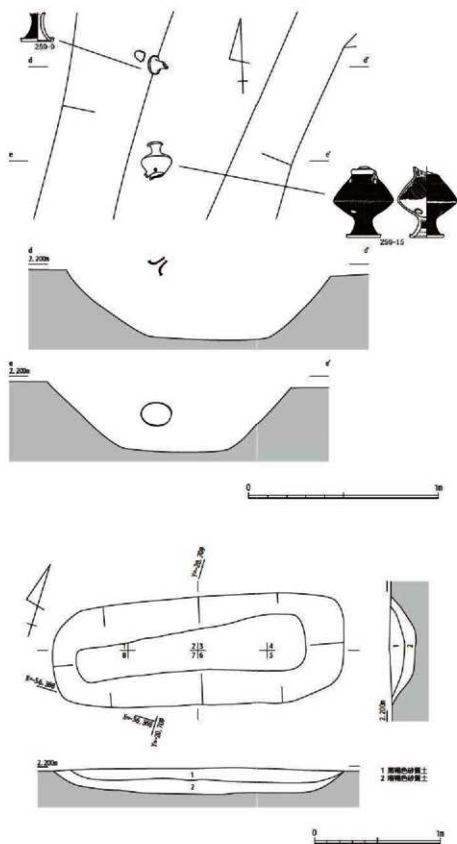
造営時期については周溝出土土器から弥生時代中期後葉と考えている。



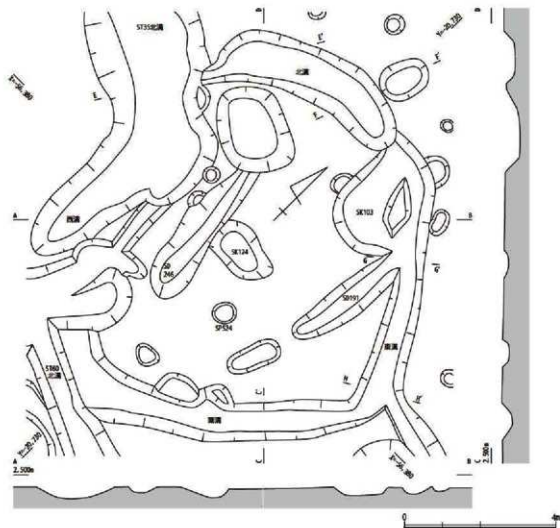
第88図 ST29全体・土層断面図(縮尺1/100・1/50)



第89図 SD321遺物出土状況図(縮尺1/20)



第90図 SD321遺物出土状況・埋葬施設実測図(縮尺1/20・1/30)



- | | | |
|----------------------|----------------------|-----------------|
| 1 黒褐色砂質土 | 4 黒褐色砂質土 | 7 暗褐色砂質土 |
| 2 黒褐色砂質土 灰褐色土ブロック少量混 | 5 暗褐色砂質土 | 8 暗褐色砂質土 |
| 3 黒褐色砂質土 灰褐色土ブロック少量混 | 6 暗褐色砂質土 灰褐色土ブロック少量混 | 9 黒褐色砂質土 黄灰色砂質土 |



- | |
|--------------------------------|
| 1 黒褐色砂質土 灰化物
・ 暗褐色粘土ブロック少量混 |
| 2 暗褐色砂質土 暗褐色土塊混 |
| 3 暗褐色砂質土 灰褐色土 |
| 4 黒褐色砂質土 |



- | |
|-----------------|
| 1 暗褐色砂質土 |
| 2 黒褐色砂質土 |
| 3 黒褐色砂質土 緑褐色少量混 |
| 4 黒褐色砂質土 |



- | |
|----------------------|
| 1 暗褐色砂質土 灰褐色土中量混 |
| 2 暗褐色砂質土 暗褐色土ブロック少量混 |
| 3 暗褐色砂質土 灰褐色土中量混 |
| 4 暗褐色砂質土 黄灰色砂質土 |

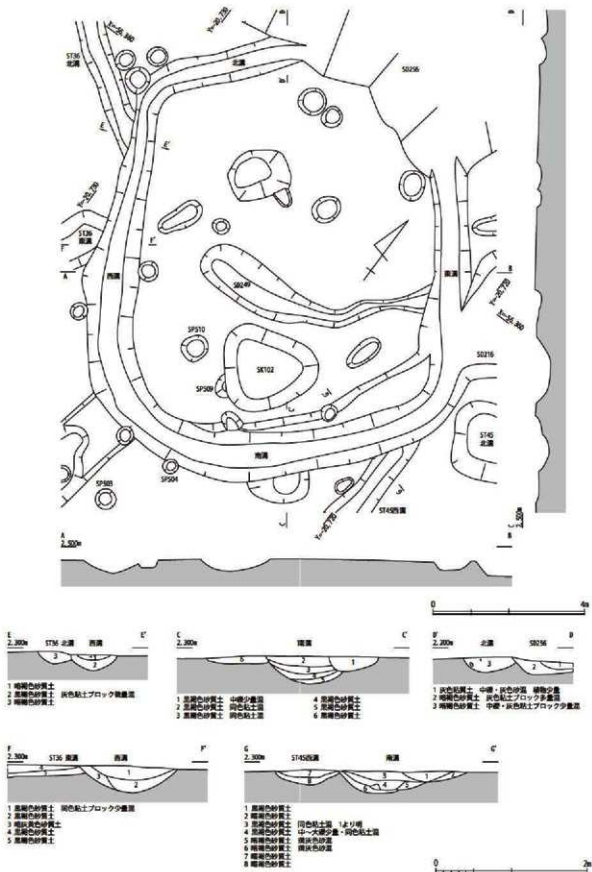


- | |
|-----------------|
| 1 暗褐色砂質土 |
| 2 暗褐色砂質土 |
| 3 暗褐色砂質土 緑褐色少量混 |

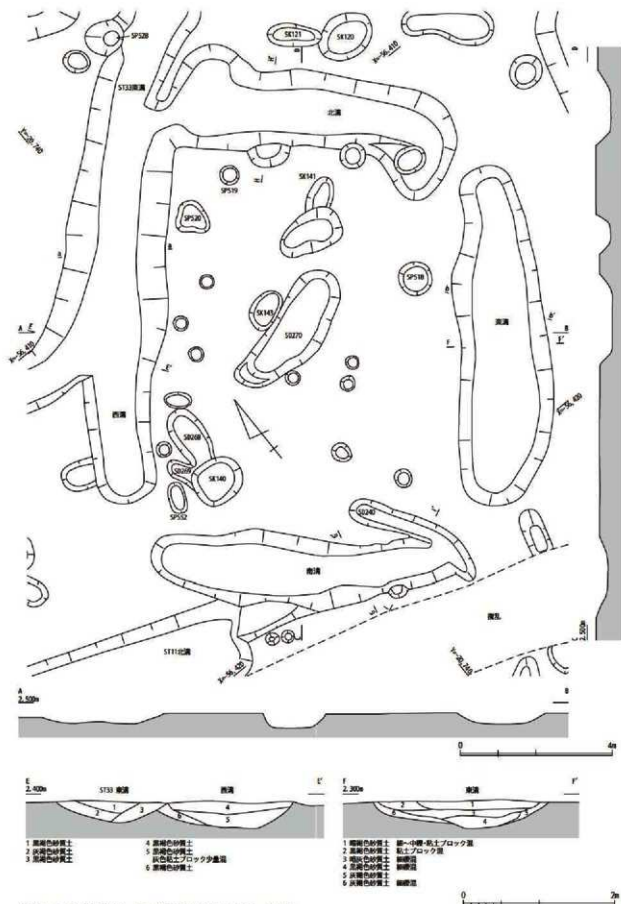


第91図 ST30実測図(縮尺1/100・1/50)

第1節 遺構

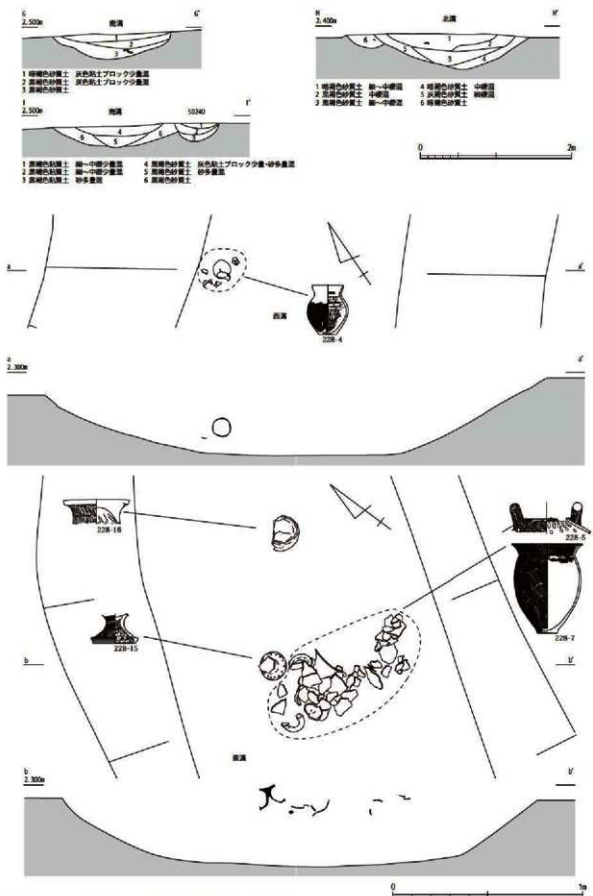


第92図 ST31実測図(縮尺1/100・1/50)

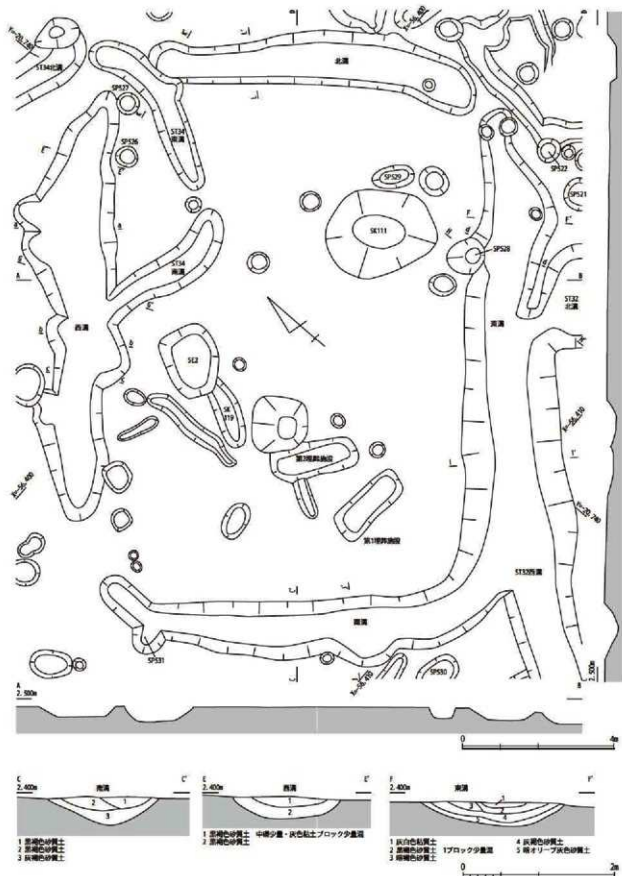


第93図 ST32全体・土層断面図(縮尺1/100・1/50)

第1節 遺構

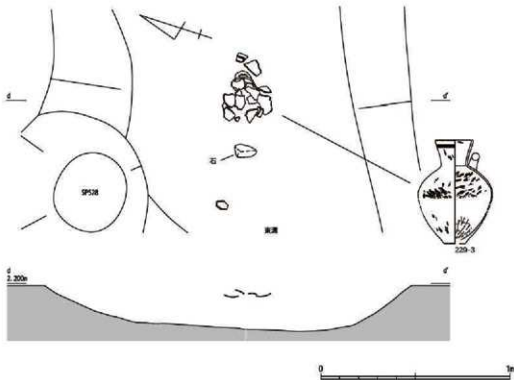
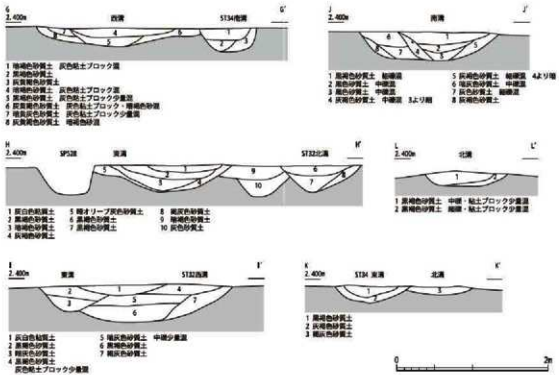


第94図 ST32土層断面・遺物出土状況図(縮尺1/50・1/20)

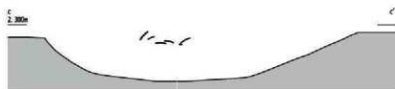
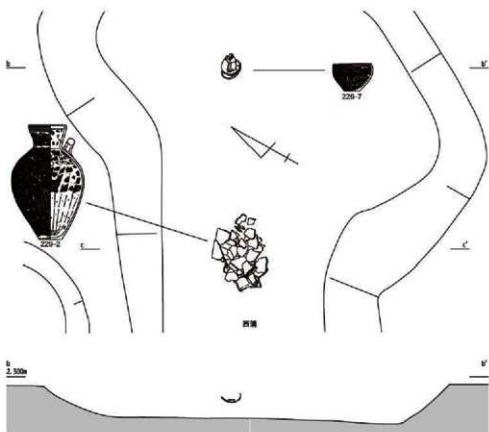
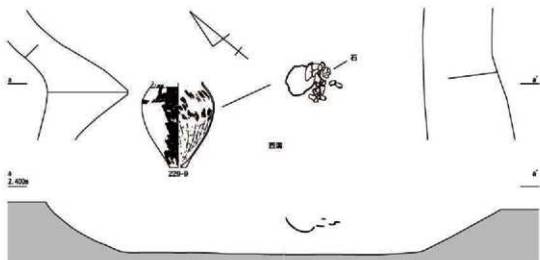


第95図 ST33全体・土層断面図(縮尺1/100・1/50)

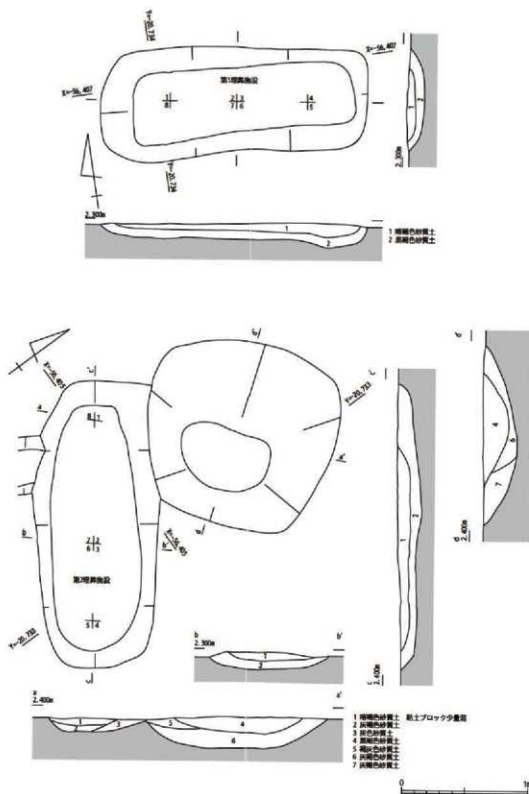
第1節 遺構



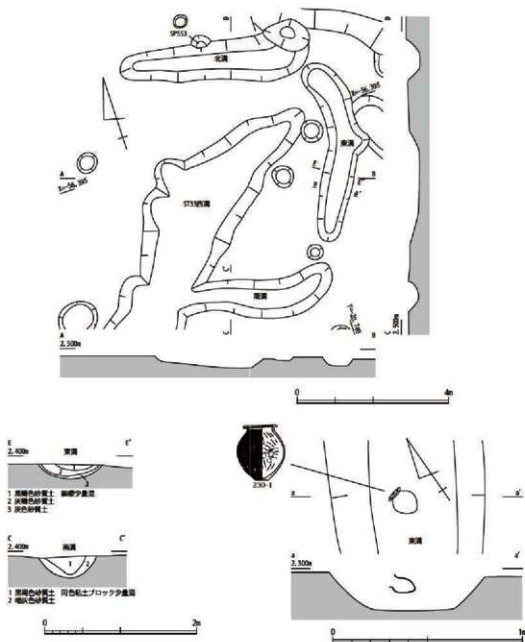
第96図 ST33土層断面・遺物出土状況図(縮尺1/50・1/20)



第97図 ST33遺物出土状況図(縮尺1/20)



第98図 ST33埋葬施設実測図(縮尺1/30)

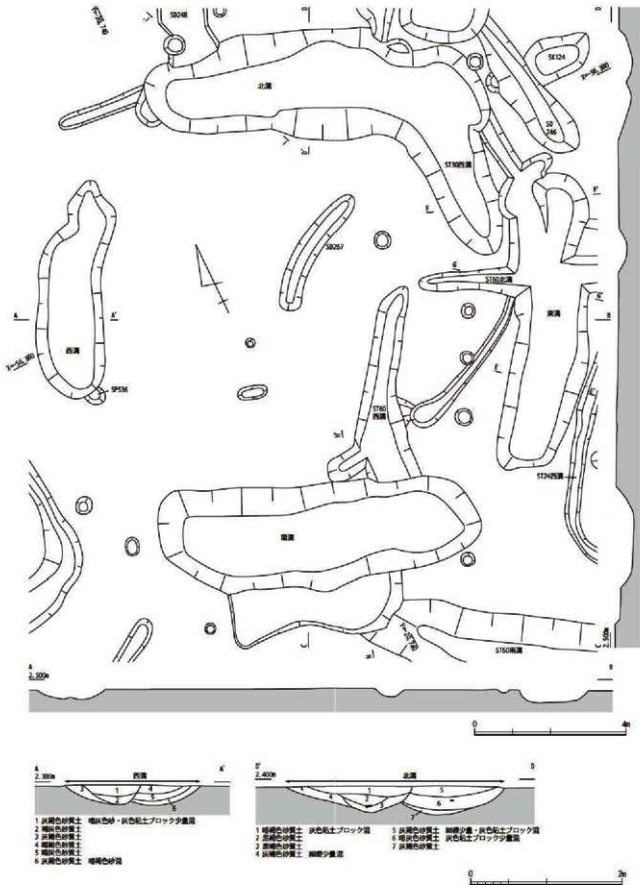


第99図 ST34実測図(縮尺1/100・1/50・1/20)

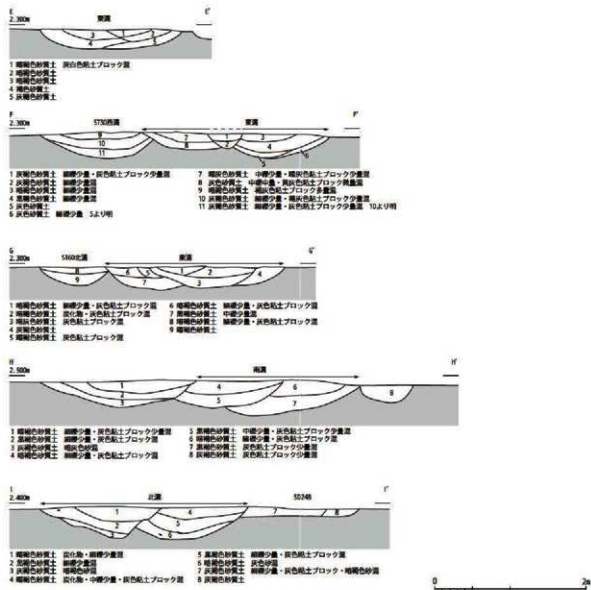
ST35(第100・101図) IV区C・D23・24グリッド、墓域北半の中央部に位置し、ST30に西接する。平面形は正方形に近く、墳丘長軸11.5m、短軸10.4mを測る。長軸方向は $N63^{\circ}W$ である。周溝は四隅で途切れ、東溝はST30西溝とST60北溝を切っている。また、それぞれの周溝の土層断面においても溝の切り合いが認められることから、再掘削が行われていると考えられる。おおむね外側の溝が内側の溝を切っている。遺物は弥生時代中期後葉および後期～終末期に位置付けられる土器(第230図2～6)が出土した。埋葬施設は確認できなかった。

造営時期について、出土土器や切り合い関係からの判断は難しい。弥生時代中期後葉～終末期の幅を考慮しておきたい。

第1節 遺構



第100図 ST35全体・土層断面図(縮尺1/100・1/50)

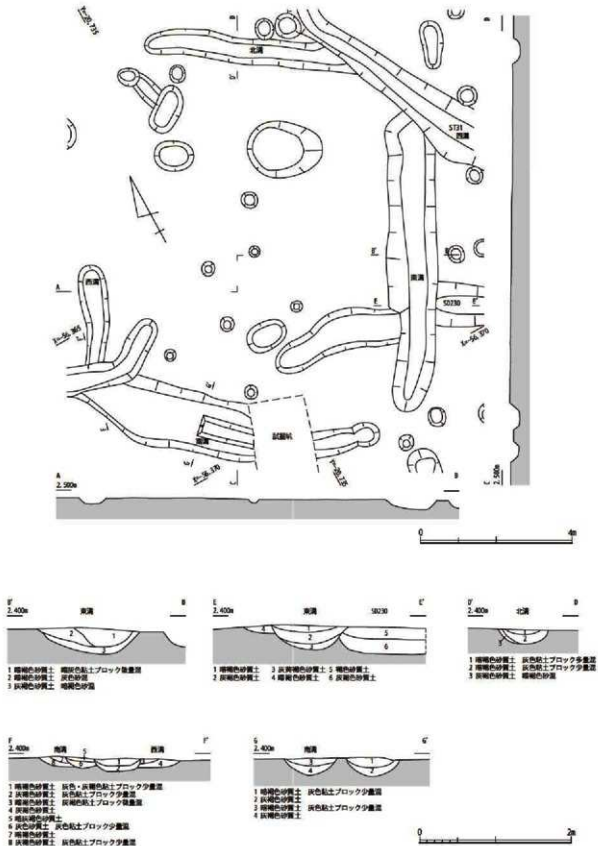


第101図 ST35土層断面図(縮尺1/50)

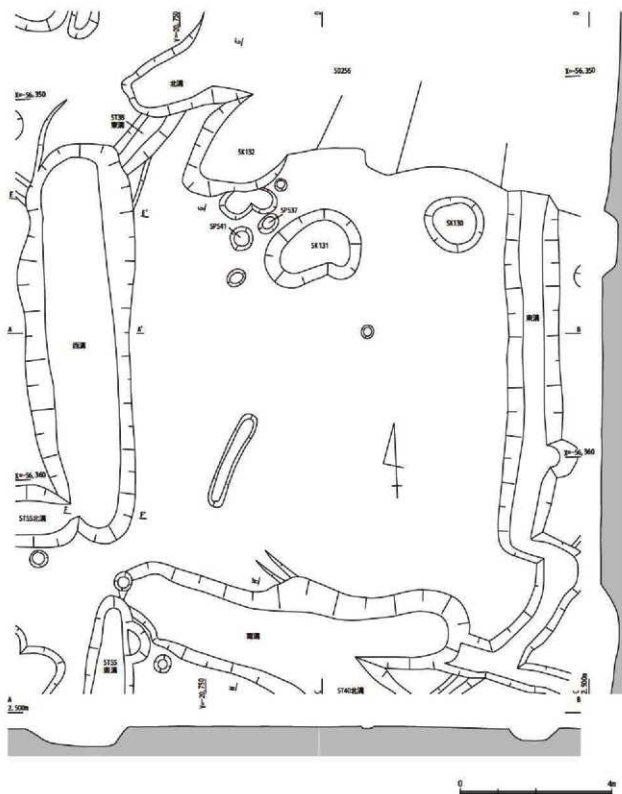
ST36 (第102図) IV区B25、C24~26グリッド、墓城北辺付近に位置し、ST31に西接する。平面形は長方形を呈し、墳丘長軸9.4m、短軸8.1mを測る。長軸方向はN29°Eである。周溝は西・南溝間を除く3箇所で見切れるようである。北溝と東溝はST31西溝に切られている。西溝は辺の半分にも満たず、削平を受けている可能性が高い。埋葬施設は明確でないが、墳丘で検出した土坑のなかにその可能性を認めうる。造営時期は不明である。

ST37 (第103・104図) IV区D・E25~27グリッド、墓城北辺西寄りに位置し、ST38に南接、ST40に北接する。平面形は長方形を呈し、墳丘長軸12.5m以上、短軸10.8mを測る。長軸はほぼ南北方向である。周溝は北西隅・南西隅・南東隅の3箇所で見切れ、北東隅については北辺の大半がSD256によって破壊されており不明である。また、南溝はST40北溝に、西溝がST55北溝にそれぞれ切れ、一方、北溝と西溝はST38を切っている。北溝から弥生時代中期後葉の土器(第231図1)が出土した。埋葬施設は確認できなかった。なお、墳丘北半にみられる土坑からは須恵器など時代を異にする遺物が出土

第1節 遺構

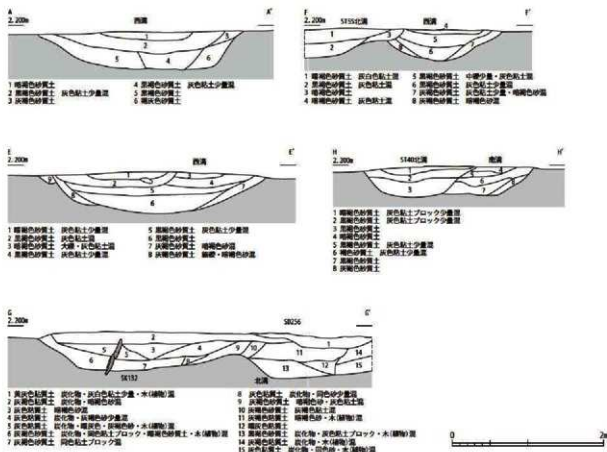


第102図 ST36実測図(縮尺1/100・1/50)



第103図 ST37全体図(縮尺1/100)

第1節 遺構



第104図 ST37土層断面図(縮尺1/50)

しており、本周溝墓に伴う可能性は低い。

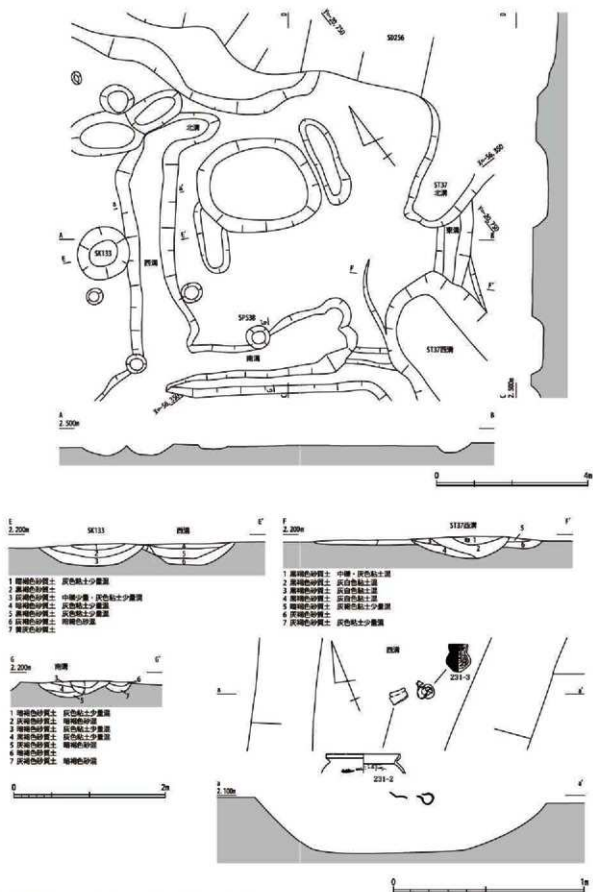
造営時期については、切り合い関係にあるST38と出土土器の時期が矛盾するため、判断が難しい。北溝が大きく破壊されていることを考慮すると、切り合い関係を重視し、弥生時代後期以降と考えるべきかもしれない。

ST38 (第105図) IV区E26・27グリッド、墓城北辺の西端に位置し、ST37に北接する。平面形は長方形を呈し、墳丘長軸7.5m、短軸5.7mを測る。長軸はN52°Wである。周溝は西溝を除き部分的な検出にとどまる。東辺はST37北・西溝に切られており、北辺については旧河道SD256の影響により周溝が削平されたものと推測される。遺物は西溝から弥生時代後期の土器(第231図2・3)が出土した。埋葬施設は確認できなかった。

造営時期については周溝出土土器から弥生時代後期の可能性が高いと考えている。

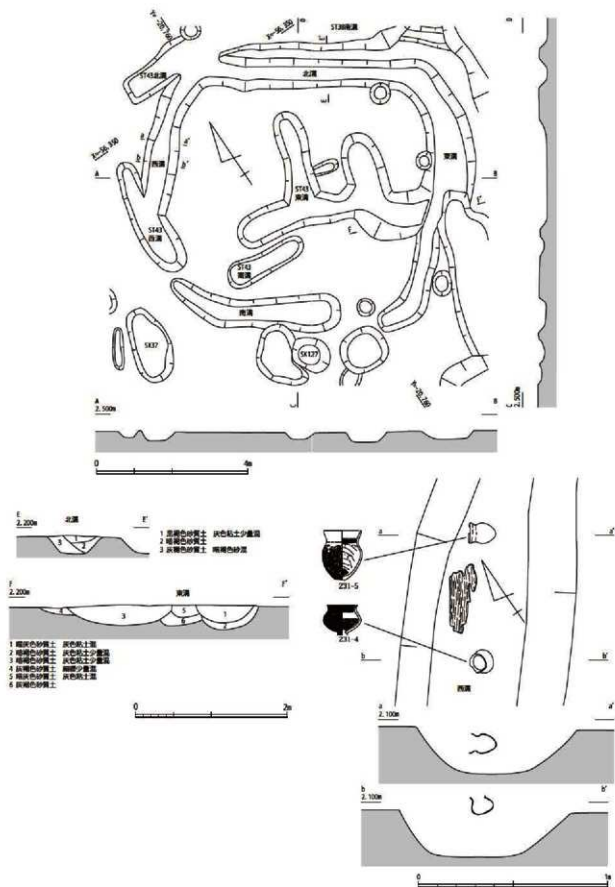
ST39 (第106図) IV区E・F26・27グリッド、墓城北辺付近の西辺に位置し、ST38に南接する。平面形は長方形を呈し、墳丘長軸7.1m、短軸5.9mを測る。長軸方向はN51°Wである。周溝は東・南溝間と西・南溝間の2箇所で見切れているが、各溝端部の延び方をみると、本来連続していた可能性も考えられる。西～北溝はST43西・北溝を切っている。西溝から弥生時代後期の土器(第231図4～6)が出土した。埋葬施設は確認できなかった。

造営時期については周溝出土土器から弥生時代後期と考えている。



第105図 ST38実測図(縮尺1/100・1/50・1/20)

第1節 遺構



第106図 ST39実測図(縮尺1/100・1/50・1/20)

ST40 (第107図) IV区D・E24・25グリッド、墓城北辺付近の西寄りに位置し、ST37に南接する。正方形に近い平面形状をもつが、各辺はやや外側へ膨らんでいる。墳丘長軸11.9m、短軸11.7mを測り、長軸方向はN35° Eである。周溝は北・東溝間、北・西溝間の2箇所ですて切れる。北溝はST37南溝を、南溝はST41南溝をそれぞれ切っている。西溝から弥生時代後期に位置付けられる近江系の鉢(第231図7)が出土した。埋葬施設は確認できなかった。

造営時期については、周溝出土土器の遺存状態があまり良くないため、積極的には言及できない。切り合い関係も考慮して弥生時代後期以降と考えておきたい。

ST41 (第108図) IV区D・E24グリッドに位置し、ST40南隅に内接する。東辺を除く三辺で周溝を検出した。南北方向で墳丘長7.0mを測る。周溝は南西隅を除く3箇所ですて切れる。東溝は後述のST40東溝に切られているとみられ、確認できなかった。

埋葬施設は墳丘の南西隅で2基検出した。L字状に切り合っており、第1埋葬施設が第2埋葬施設を切っている。

造営時期については、帰属時期の明らかな土器が出土しておらず、切り合いからも判断できない。

ST42 (第109図) IV区D・E23・24グリッド、墓城北半中央やや西寄りに位置し、ST40に南接、ST46に東接する。平面形は長方形を呈し、墳丘長軸8.4m、短軸6.6mを測る。長軸はほぼ東西方向である。周溝は北東隅・北西隅の2箇所ですて切れているが、南西隅の形状はST47北溝に切られているため明らかにすることができない。さらに西溝はST46東溝にも切られており、その北端部分しか検出できなかった。また、北溝についてはST40東～南溝に切られて確認できないものと考えたが、位置関係からすれば、ST41南溝が両者で共有されていた可能性もあろう。埋葬施設は確認していない。

造営時期については、後述するようにST46が弥生時代中期中葉に遡る可能性が高く、それに先行する本周溝墓も同様に位置付けられよう。

ST43 (第110図) IV区E・F26・27グリッドに位置し、大半はST39の北西部と重なる。平面形は長方形を呈し、墳丘長軸5.4m、短軸3.9mを測る。長軸方向はN8° Eである。周溝は四隅ですて切れ、北・西溝はST39西溝に切られている。西溝から弥生時代中期中葉の壺(第231図8)が原形を保って出土した。埋葬施設は確認できなかった。

造営時期については、周溝出土土器から弥生時代中期中葉と考えている。

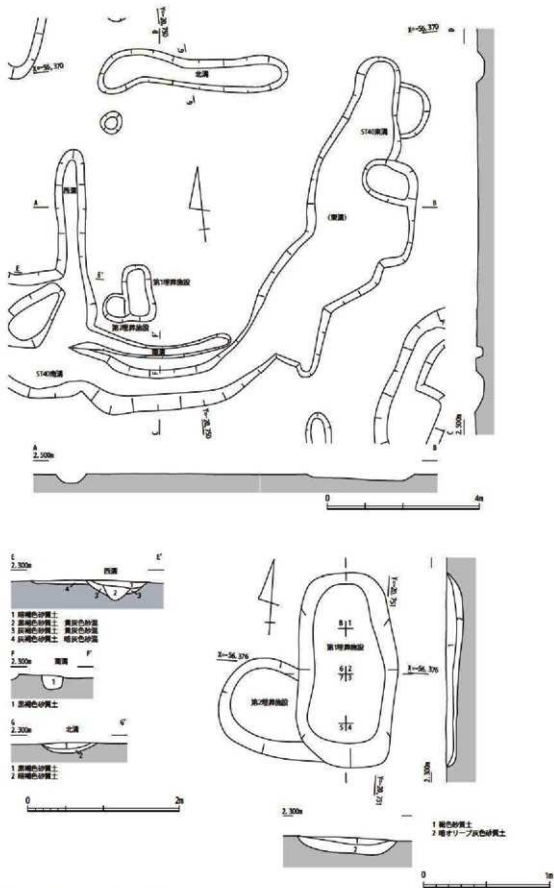
ST44 (第111図) IV区Z24・25グリッド、墓城北東端に位置し、ST27に北接、ST29に東接する。平面形は長方形を呈し、墳丘長軸7.6mを測る。長軸方向はN20° Eである。周溝は全周するものと考えているが、西溝とSD321の関係が不明であり、断定はできない。南溝はST27北溝を切っていると間接的に判断できる。北溝から弥生時代中期中葉の細頸壺(第231図9)が出土した。遺存状態が悪く、混入品の可能性がある。埋葬施設は確認できなかった。

造営時期については積極的に言及できない。

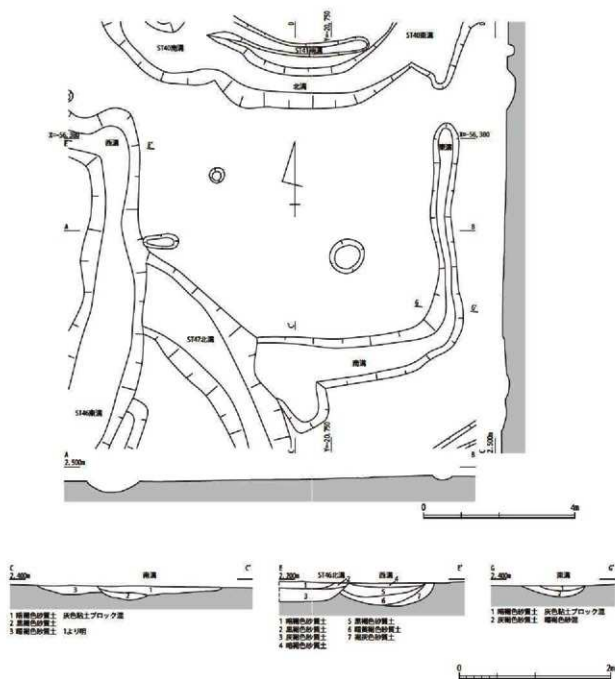
ST45 (第112・113図) IV区A25グリッド、墓城北辺東寄りに位置し、ST29に西接、ST31に東接する。平面形は長方形を呈し、墳丘長軸7.2m、短軸6.1mを測る。長軸方向はN82° Wである。周溝は西辺両端の2箇所ですて切れる。西溝はST31南溝に切られている。周溝からは弥生時代中期後葉の土器(第231図10～13)が出土した。なかでも台付鉢(12)と壺(13)は、西溝の底面直上で形状を保って出土した。埋葬施設は確認できなかった。

造営時期については周溝出土土器から弥生時代中期後葉と考えている。

第1節 遺構

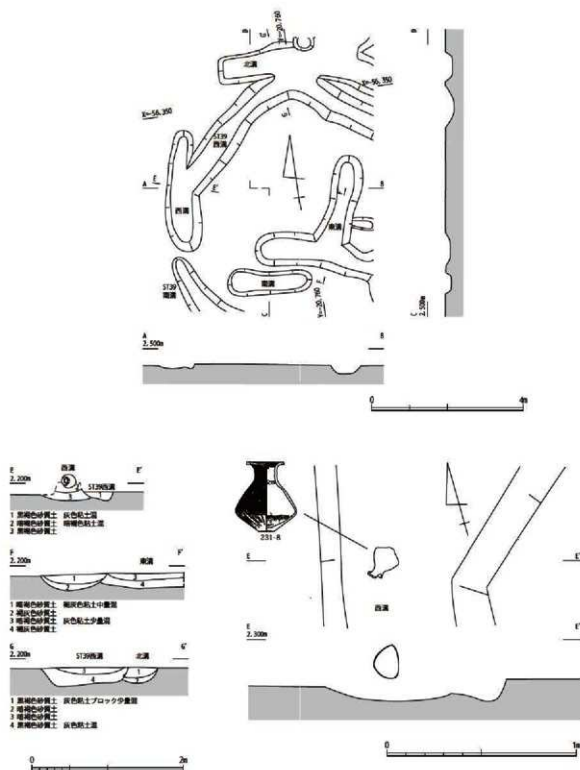


第108図 ST41実測図(縮尺1/100・1/50・1/30)

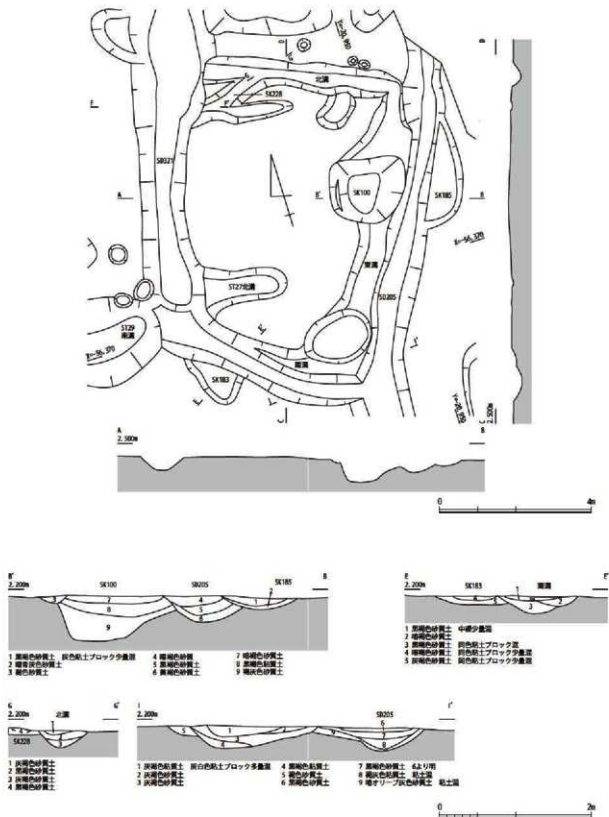


第109図 ST42実測図(縮尺1/100・1/50)

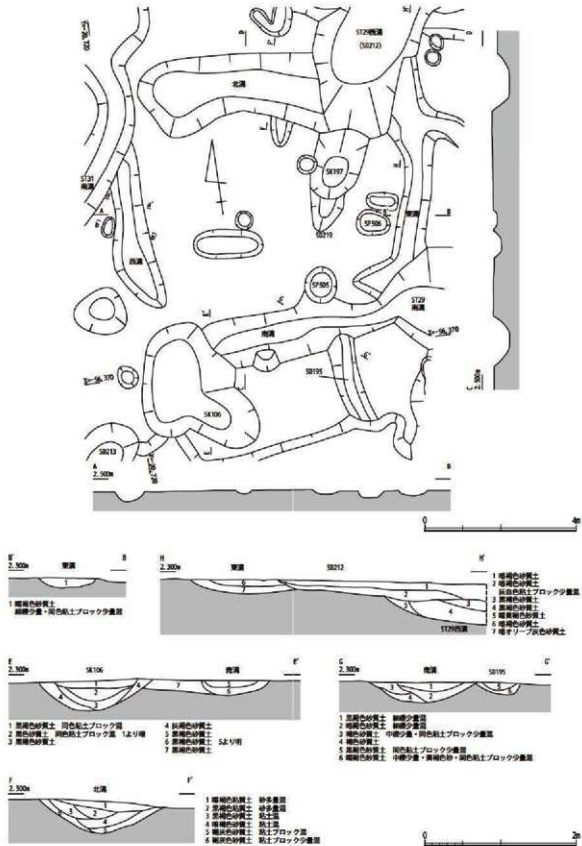
第1節 遺構



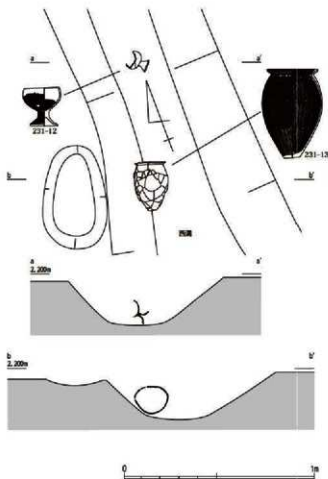
第110図 ST43実測図(縮尺1/100・1/50・1/20)



第114図 ST44実測図(縮尺1/100・1/50)



第112図 ST45全体・土層断面図(縮尺1/100・1/50)



第113図 ST45遺物出土状況図(縮尺1/20)

ただし、西溝や南溝は検出深度が非常に浅く、検出面より上位で溝に伴うであろう土器を検出していることから、この周溝の途切れる箇所に関しては、遺構プラン検出時に掘形を完全にとばしてしまっただけの可能性もある。その場合、西溝の延長上にある数基の土坑は周溝の名残とも捉えられよう。ほかの周溝墓との切り合い関係では、ST42・46・48・50のすべてを切っている。周溝からは弥生時代終末期の土器(第232図2～5)が出土した。埋葬施設は確認できなかった。

造営時期については周溝出土土器から弥生時代終末期と考えている。

ST48(第118図) IV区E22グリッドに位置し、ST46・50に東接する。平面形は正方形に近く、墳丘長軸8.7m、短軸8.1mを測る。長軸はN56°Wである。周溝は北辺両端の2箇所ですぐ途切れる。北溝はST47北～東溝に、西溝はST46東溝に切られている。埋葬施設は確認できなかった。

造営時期については切り合い関係から弥生時代中期後葉以後、終末期以前と考えている。

ST49・53・57(第119・120図) IV区F・G21・22グリッド、ST50の墳丘で検出した。いずれも墳丘一辺5m前後と小型で、L字状に連結する。ST49とST57は溝を共有するが、ST53北溝はST49南溝を切っている。また、ST49の北辺、ST53の南辺、ST57の西辺はST50の周溝に重複し、区画溝は確認できなかった。ST49・53の墳丘では数基の土坑を検出しており、埋葬施設を含む可能性がある。造営時期は不明である。

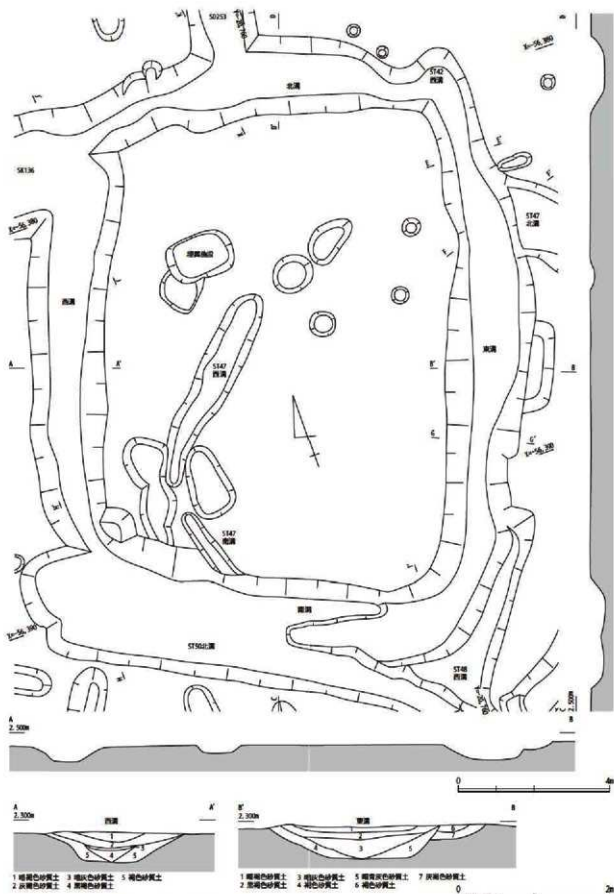
ST46(第114・115図) IV区E・F22～24グリッド、墓城北半の西辺に位置し、ST50に北接する。平面形は長方形を呈し、墳丘長軸13.2m、短軸10.2mを測る。長軸方向はN19°Eである。周溝は全周する。北溝および東溝はST42西溝を切っており、一方、東溝はST47北溝に、南溝はST47南溝に、西溝はST50北溝にそれぞれ切られている。西溝から弥生時代中期後葉の壺(第232図1)が出土した。

埋葬施設は墳丘の北東寄りですぐ確認した。墳丘北辺にはほぼ平行する。

造営時期については、北溝を切っているSD253の埋土下層で出土した土器(第258図5～8)の様相から、弥生時代中期中葉に遡る可能性が高いと考えている。

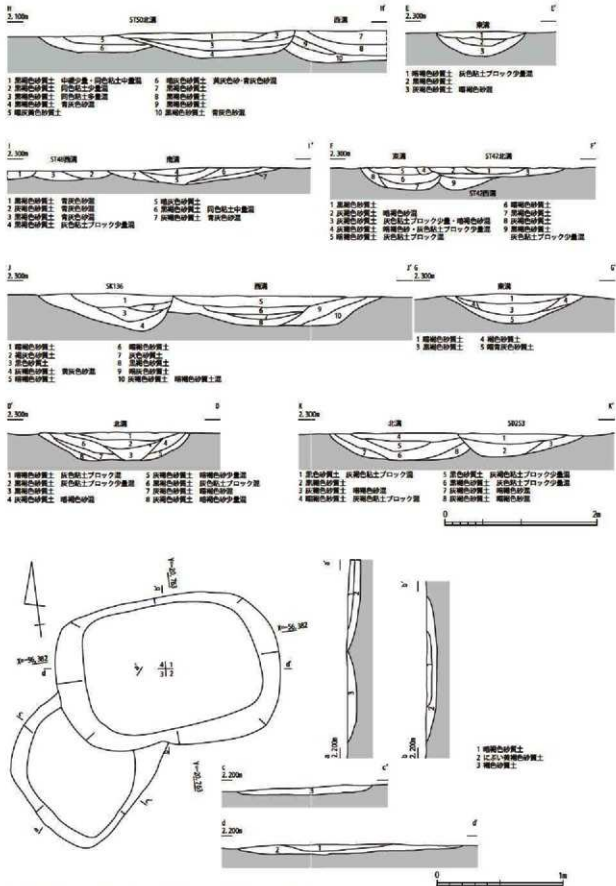
ST47(第116・117図) IV区E・F22・23グリッドに位置し、ST46南隅に大きく重なる。平面形は正方形に近く、墳丘は一辺11m前後を測る。周溝は北隅・西隅・南隅の3箇所ですぐ途切れる。

第1節 遺構



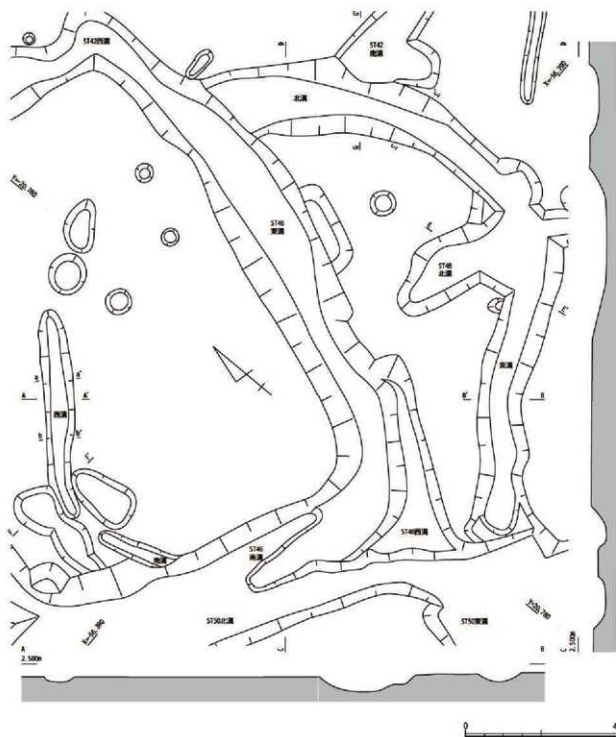
第114圖 ST46全体・土層断面図(縮尺1/100・1/50)

第4章 遺構と遺物



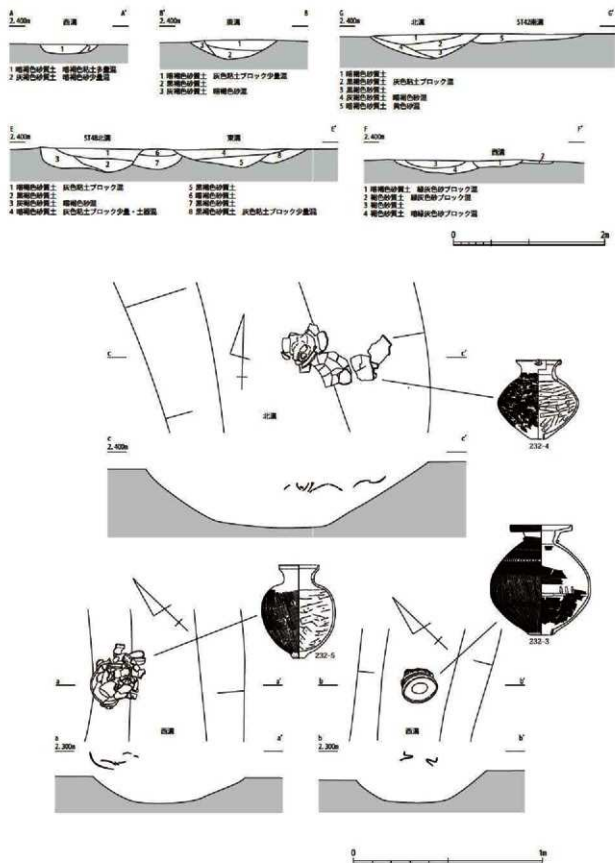
第115図 ST46土層断面・埋葬施設実測図(縮尺1/50・1/30)

第1節 遺構



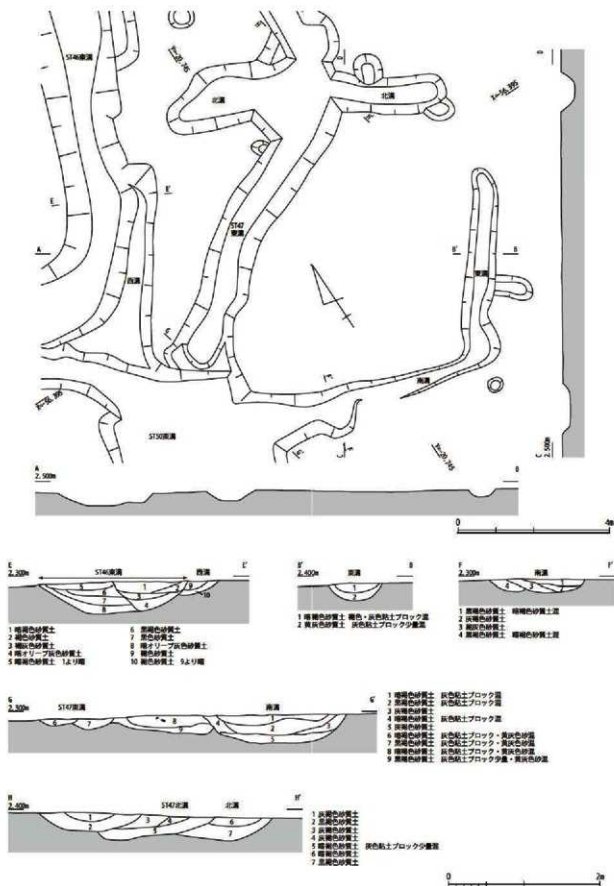
第116圖 ST47全体図(縮尺1/100)

第4章 遺構と遺物



第117図 ST47土層断面・遺物出土状況図(縮尺1/50・1/20)

第1節 遺構



第118図 ST48実測図(縮尺1/100・1/50)

ST50 (第119～121図) IV区F・G21～23グリッド、墓域中央部の西辺に位置し、ST46の南辺、およびST59の北辺に接している。平面形は正方形に近く、墳丘の規模は一辺13m前後を測る。軸方向は東西でN60°Wである。周溝は北・西溝間および南・西溝間の2箇所で見切れている。土層断面から、いずれの辺の周溝も再掘削が行われたと考えられ、それに伴い各辺が徐々に外側へ広がっていく様子がうかがえる。さらに、最も内側に位置する周溝をみると、南溝の東端や東溝の北端で収束するかのような平面形状を呈しており、北・東溝間および南・東溝間でも見切れる可能性が高い。つまり、当初掘削された周溝は四隅切れの形状であり、再掘削の過程で東隅と南隅がつつがったものと考えられる。隣接するほかの方形周溝墓との切り合い関係では、北溝がST46西～南溝を、東溝がST52北・南溝を切っている。また、北溝はST47南溝に切られている。遺物は再掘削された北溝の埋土上位から弥生時代後期の壺(第232図6)が出土した。

埋葬施設は周溝内で1基確認した。南溝の中央付近に位置し、掘形は溝の埋没が進んでから掘り込まれている。木棺墓であり、底板(第310図3)のみ遺存していた。樹種はスギと同定され、¹⁴C年代測定により2世紀後半の年代値が得られている(第5章第3節)。

造営時期については出土土器から弥生時代後期と考えており、これは木棺の年代とも整合する。

ST52 (第122図) IV区E・F21・22グリッドに位置する。長軸方向を後出するST50東溝・SD262が貫いており、北・南溝と墳丘は部分的にしか遺存していない。周溝は西・南溝間を除く3箇所で見切れるようである。西溝から弥生時代中期に属するほぼ完形の鉢(第232図7)が出土した。埋葬施設は確認できなかった。

造営時期については周溝出土土器から弥生時代中期と考えている。

ST54 (第123～125図) IV区Z・A22グリッド、墓域北半の東辺に位置する。平面形は長方形を呈し、墳丘長軸6.3m、短軸5.6mを測る。長軸方向はN35°Eである。周溝は四隅で見切れる形状とみられる。周溝から弥生時代中期後葉の土器(第233図1～4)が出土した。埋葬施設は確認していない。

造営時期については周溝出土土器から弥生時代中期後葉と考えている。

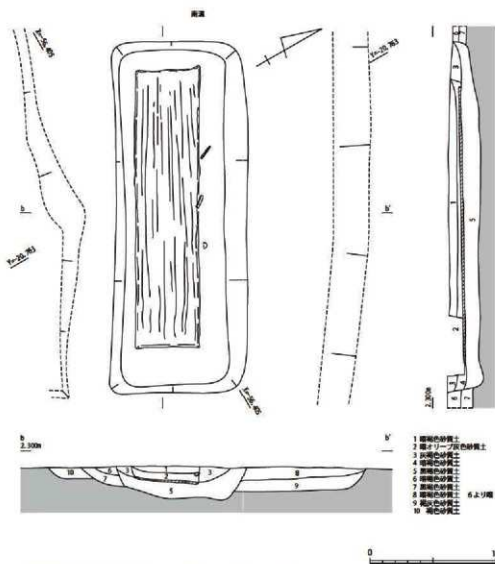
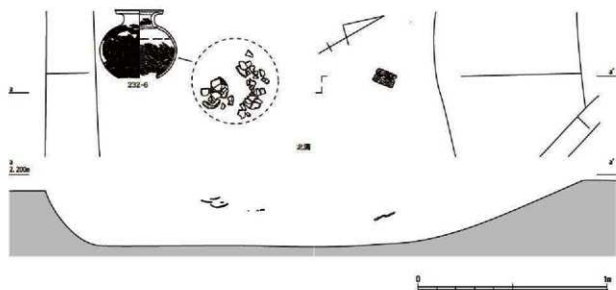
ST55 (第126図) IV区E24・25、F25グリッドに位置し、ST37の南西隅に接する。平面形は長方形を呈し、墳丘長軸9m、短軸7.9mを測る。長軸方向はN7°Eである。周溝は四隅で見切れ、北溝はST37西溝を切っている。埋葬施設は確認していないが、墳丘の中心付近に位置する土坑SK134にその可能性がある。造営時期は不明である。

ST58 (第127・128図) IV・VII区E・F20グリッド、墓域中央部の西寄りに位置し、ST11の北西、ST19の北東に接する。正方形に近い平面形を呈し、墳丘一辺約7m、南北方向の軸でN27°Eを測る。周溝は北・西溝間と東・南溝間で見切れ、西隅については現代水路による攪乱のため確認できない。西溝はST19北溝に切られている。遺物は北溝で弥生時代中期後葉の壺(第233図5)、西溝で中期中葉の壺(同図6)が出土した。後者は混入品とみられる。埋葬施設は確認できなかった。

造営時期については北溝出土土器から弥生時代中期後葉と考えている。

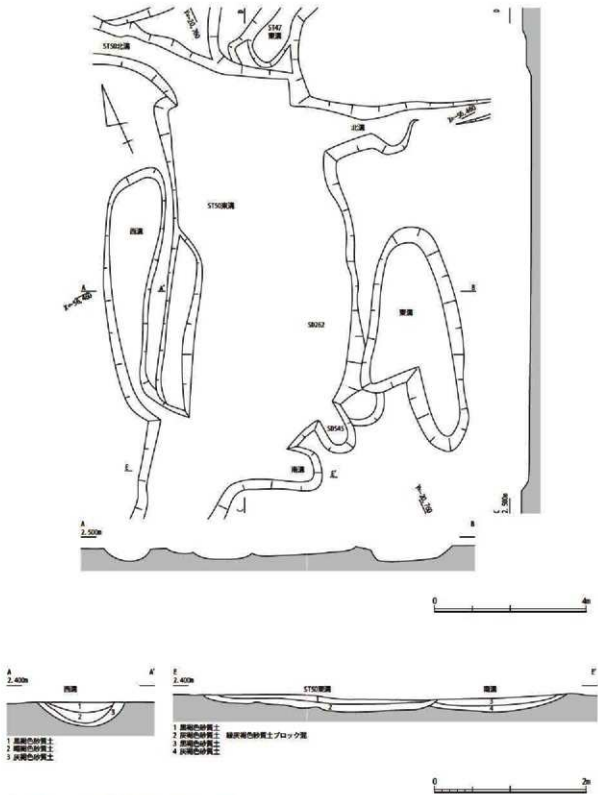
ST59 (第129図) II・IV・VII区G・H20・21グリッド、墓域中央部の西辺に位置し、ST6の北、ST50の南西に接する。正方形に近い平面形を呈し、墳丘一辺10m前後、南北方向の軸でN17°Eを測る。周溝は北・西溝間と西・南溝間の2箇所で見切れ、南溝はST6北溝に墳丘側を切られている。墳丘では数基の土坑を検出しており、埋葬施設を含む可能性がある。

造営時期については切り合い関係から弥生時代中期後葉を下らないものと考えている。

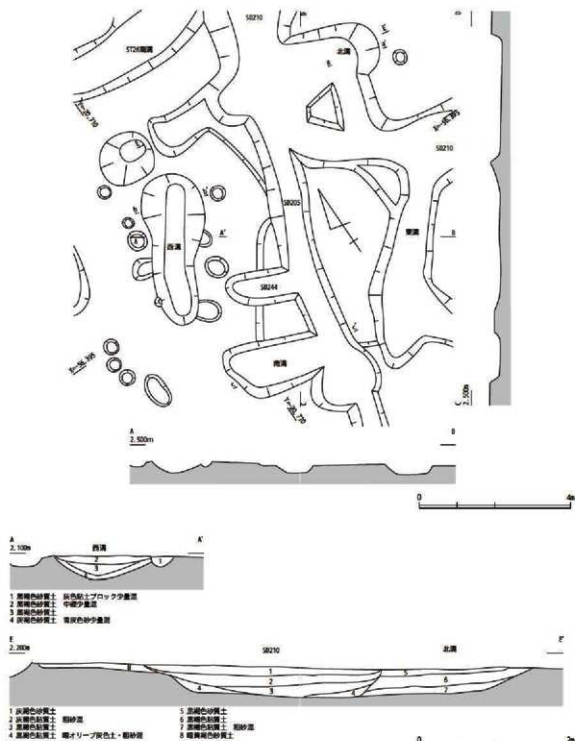


第121図 ST50遺物出土状況・埋葬施設実測図(縮尺1/20・1/30)

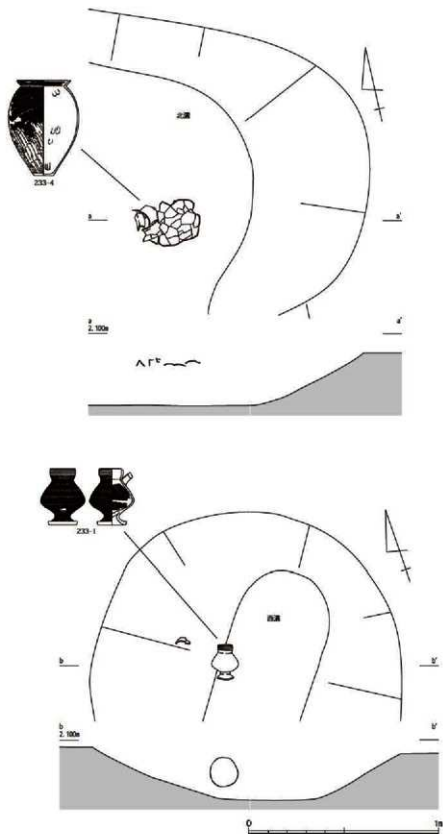
第1節 遺構



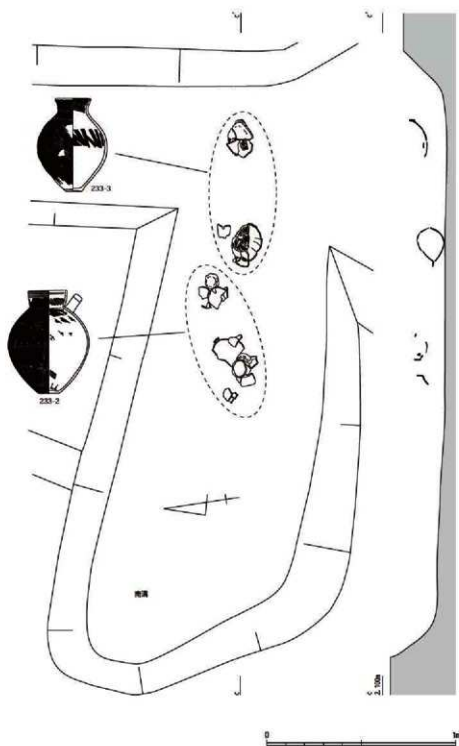
第122図 ST52実測図(縮尺1/100・1/50)



第123図 ST54全体・土層断面図(縮尺1/100・1/50)

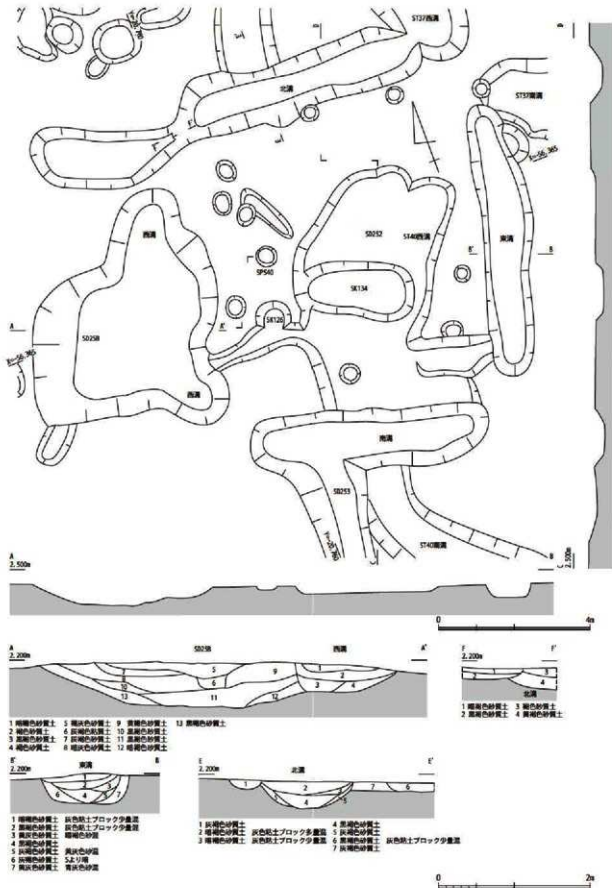


第124図 ST54遺物出土状況図(縮尺1/20)

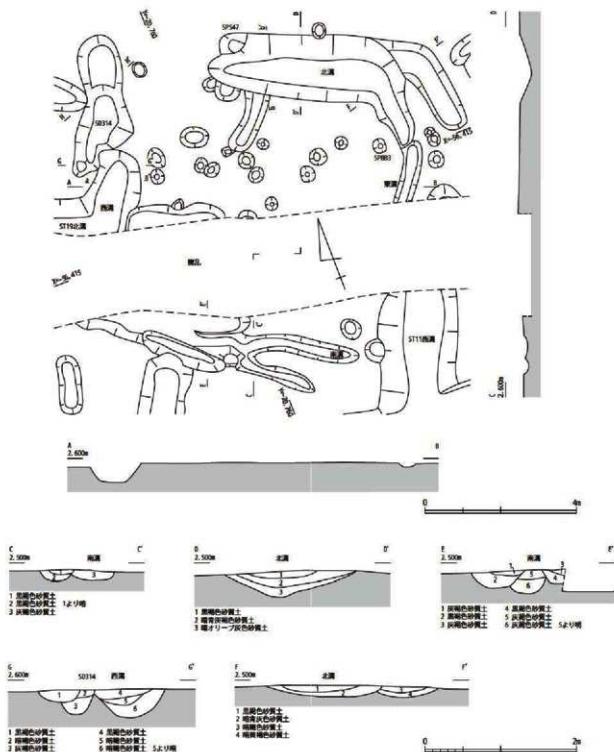


第125図 ST54遺物出土状況図(縮尺1/20)

第1節 遺構

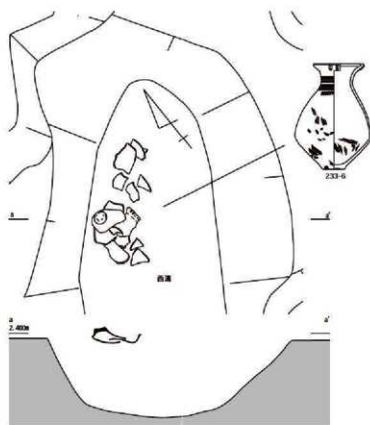
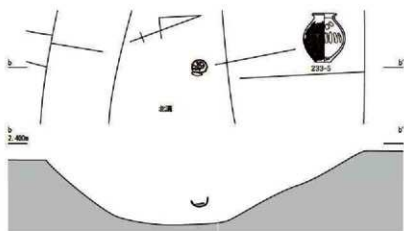


第126図 ST55実測図(縮尺1/100・1/50)

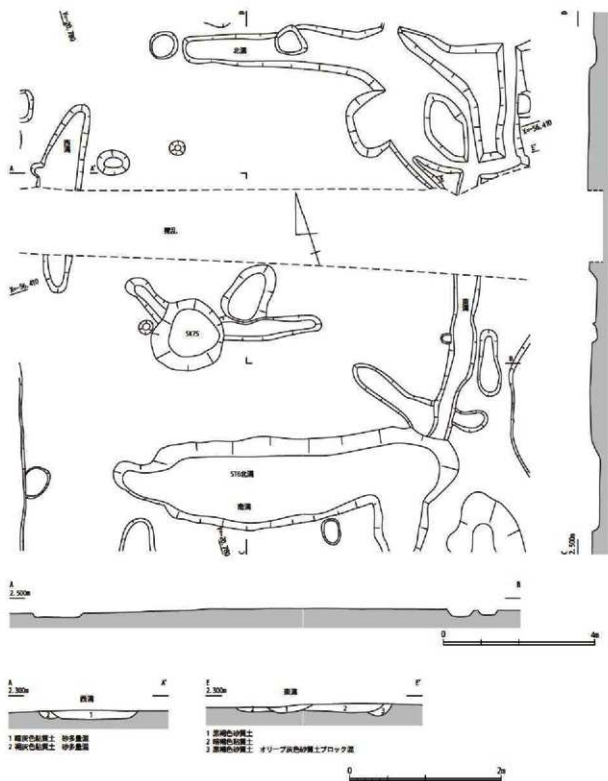


第127図 ST58全体・土層断面図(縮尺1/100・1/50)

第1節 遺構



第128図 ST58遺物出土状況図(縮尺1/20)



第129図 ST59実測図(縮尺1/100・1/50)

ST60 (第130～132図) IV区B・C22・23グリッド、墓城北半中央部のやや東寄りに位置する。ST23の北西、ST30の南に接し、ST35南東隅と切り合う。平面形は長方形を呈し、規模は墳丘長軸11m以上、短軸9.8mを測る。長軸方向はN52°Wである。周溝は北・西溝間で途切れており、また、ST35南溝に切られて明確ではないが、残された溝の平面形状と配置から西・南溝間も途切れる可能性が高い。そのほかの溝の切り合い関係では、北溝がST24北溝とST30南溝に、東溝がST23西溝とST24東溝にそれぞれ切られている。遺物は北溝の底面近くから弥生時代中期後葉の甕(第233図7)が出土した。

埋葬施設は切り合い関係をもつ3基を認めた。墳丘中央からやや東寄りに位置する。これらはST24の周溝区画内にも収まっており、当初はそちらに伴う埋葬施設としていた。しかし後に、掘形の遺存状況がST24周溝に比べて良好なことや、軸方向がむしろST60の墳丘に揃うことから、認識を改めた経緯がある。第1埋葬施設と3埋葬施設がL字状に切り合い、第2埋葬施設がその西側で第1埋葬施設と長軸をややずらして切り合っている。切り合い関係からみた構築順は第3→2→1埋葬施設となる。第2埋葬施設はほかと比べて不整形な平面形を呈し、深く掘り込まれている。いずれからも棺材の出土はなく、埋土にもその痕跡は認められない。一方、第1埋葬施設の西端に土坑状の落ち込みが認められ、木棺の小口板を挿入した施設あるいは痕跡の可能性を考えている。すでにみたように、ST1の第6埋葬施設にも同様の痕跡を認めている。

造営時期については周溝の底面付近から出土した土器や切り合い関係から弥生時代中期後葉の可能性が高いと考えている。

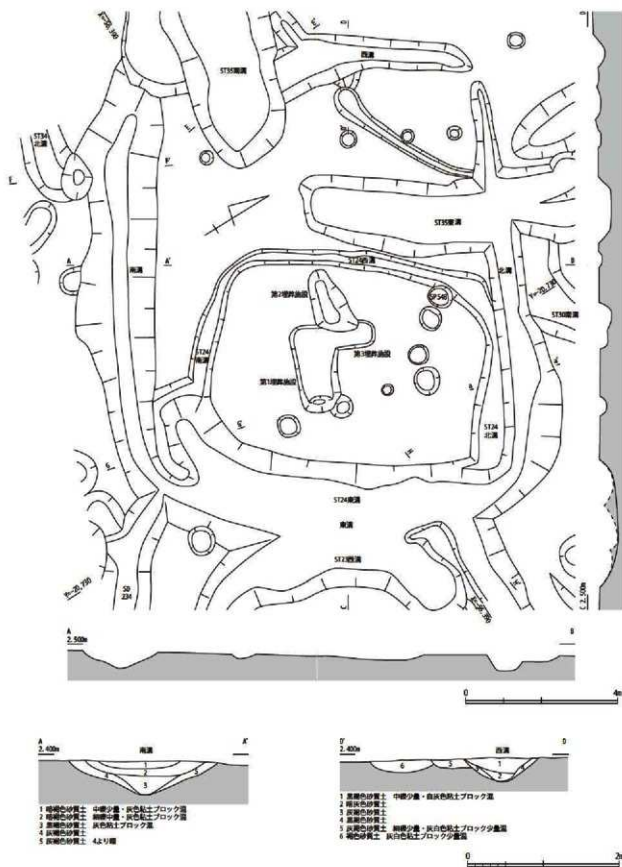
ST61 (第133図) IV区A・B22・23グリッド、墓城北半中央部の東側に位置し、ST25の西側に接する。長方形の平面形をもつ小型の方形周溝墓で、規模は墳丘長軸5.4m、短軸約4mを測る。長軸方向はN58°Wである。周溝は四隅で途切れる形状であり、北溝はST25北溝を切っている。北溝底面の墳丘寄りから底部を欠失した弥生時代後期の甕(第233図8)が逆位で出土した。埋葬施設は確認できなかった。

造営時期については周溝出土土器から弥生時代後期と考えている。

ST62 (第134～138図) VI区G・H29～31グリッド、調査区の北端近くに位置する。ほかの多数の方形周溝墓が密集する墓域から北西に約30m離れて、この1基のみを検出した。南側で周溝建物SH5～8と接している。平面形は長方形を呈し、墳丘の規模は長軸11.2m、短軸9mを測る。長軸方向はN75°Wである。周溝は北・西溝間の1箇所ですべて途切れている。また、そのほかの連続する各隅においては、やや溝幅が狭くなり、深さも浅い傾向にある。周溝建物との切り合い関係では、西～南溝の隅がSH6の周溝SD343およびSH8の周溝SD331に切られており、すべての建物に対して時間的に先行すると判断できる。周溝からはほぼ完形になる多くの土器(第234図)が出土した。北・東・南溝で検出した土器(1～8)は弥生時代中期中葉に、主に西溝で検出した土器(9～13)は後期に位置付けられる。前者は周溝の墳丘寄りから中央部にかけて、埋土中～上位で出土している。形状を保っていたものや、土圧によりその場で潰れたような出土状況を示す個体が多い。東溝の北半で検出した大小2個体の壺(1・2)は、口縁部と底部の位置を逆に並んで出土している。一方、西溝において、弥生時代後期の土器は周溝外縁に沿って遺構検出面より高い位置で出土している。同様の出土状況は建物の周溝と切り合う付近から続いており、建物域に関連する土器群の可能性が高い。

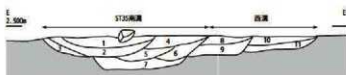
埋葬施設は確認できなかったが、墳丘では数基の浅い土坑を検出している。

造営時期については北・東・南溝出土土器から弥生時代中期中葉と考えている。

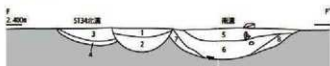


第130図 ST60全体・土層断面図(縮尺1/100・1/50)

第1節 遺構



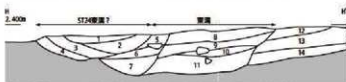
- | | | | |
|----------|-------------------|-----------|------------|
| 1 暗褐色砂質土 | 中礫多量・灰色粘土ブロック少量 | 7 灰褐色砂質土 | 暗褐色砂質土 |
| 2 黒褐色砂質土 | 灰色砂、暗褐色砂、灰色粘土ブロック | 8 暗褐色砂質土 | 灰色粘土ブロック少量 |
| 3 灰褐色砂質土 | 暗褐色砂 | 9 暗褐色砂質土 | 灰色粘土ブロック少量 |
| 4 暗褐色砂質土 | 暗褐色砂、灰色粘土ブロック少量 | 10 暗褐色砂質土 | 灰色粘土ブロック少量 |
| 5 黒褐色砂質土 | | 11 暗褐色砂質土 | 灰色粘土ブロック少量 |
| 6 黒褐色砂質土 | | | |



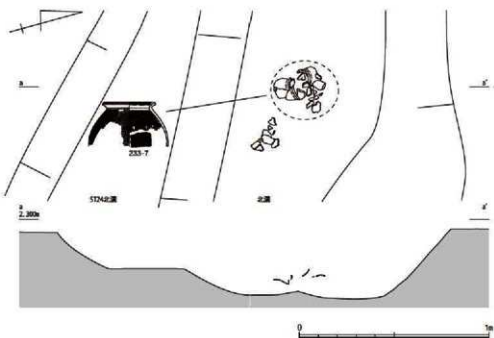
- | | | | |
|----------|---------------|----------|-----------------|
| 1 暗褐色砂質土 | 中礫中量、粘土ブロック少量 | 5 暗褐色砂質土 | 中礫多量、粘土ブロック |
| 2 暗褐色砂質土 | 暗褐色砂、粘土ブロック | 6 暗褐色砂質土 | 中礫中量、粘土ブロック、土層理 |
| 3 暗褐色砂質土 | 暗褐色砂、粘土ブロック | 7 暗褐色砂質土 | 暗褐色砂 |
| 4 灰褐色砂質土 | 粘土ブロック少量 | 8 灰褐色砂質土 | |



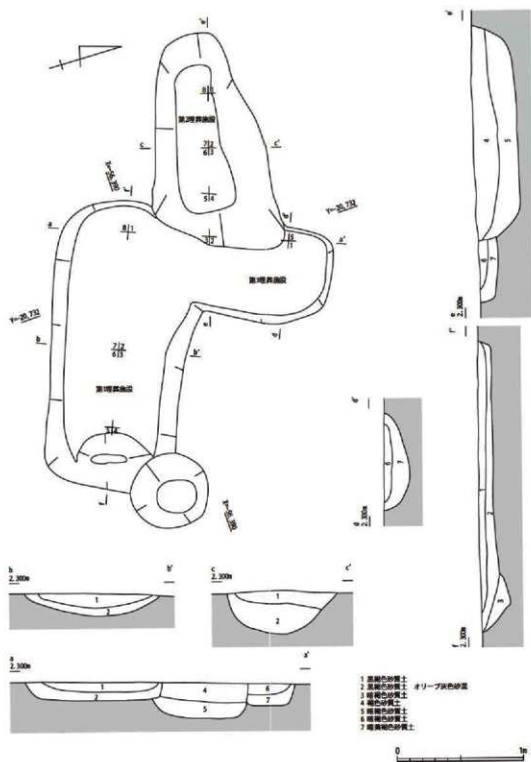
- | | | | |
|----------|---------------|-----------|---------------|
| 1 暗褐色砂質土 | 中礫中量、暗褐色砂 | 7 暗褐色砂質土 | 暗褐色砂少量 |
| 2 暗褐色砂質土 | 暗褐色砂 | 8 灰褐色砂質土 | 暗褐色砂少量 |
| 3 灰褐色砂質土 | 暗褐色砂、土より明 | 9 暗褐色砂質土 | 暗褐色砂、粘土ブロック少量 |
| 4 暗褐色砂質土 | 暗褐色砂、粘土ブロック少量 | 10 暗褐色砂質土 | 暗褐色砂 |
| 5 暗褐色砂質土 | 暗褐色砂 | 11 灰褐色砂質土 | 暗褐色砂 |
| 6 暗褐色砂質土 | 暗褐色砂 | 12 暗褐色砂質土 | 暗褐色砂、土より明 |



- | | | | |
|----------|-----------|------------------|-----------|
| 1 暗褐色砂質土 | 4 暗褐色砂質土 | 灰色粘土、黄褐色粘土ブロック少量 | 11 暗褐色砂質土 |
| 2 暗褐色砂質土 | 7 暗褐色砂質土 | | 12 暗褐色砂質土 |
| 3 暗褐色砂質土 | 8 暗褐色砂質土 | 灰色粘土ブロック少量 | 13 暗褐色砂質土 |
| 4 暗褐色砂質土 | 9 暗褐色砂質土 | 灰色粘土ブロック少量 | 14 暗褐色砂質土 |
| 5 暗褐色砂質土 | 10 暗褐色砂質土 | | |

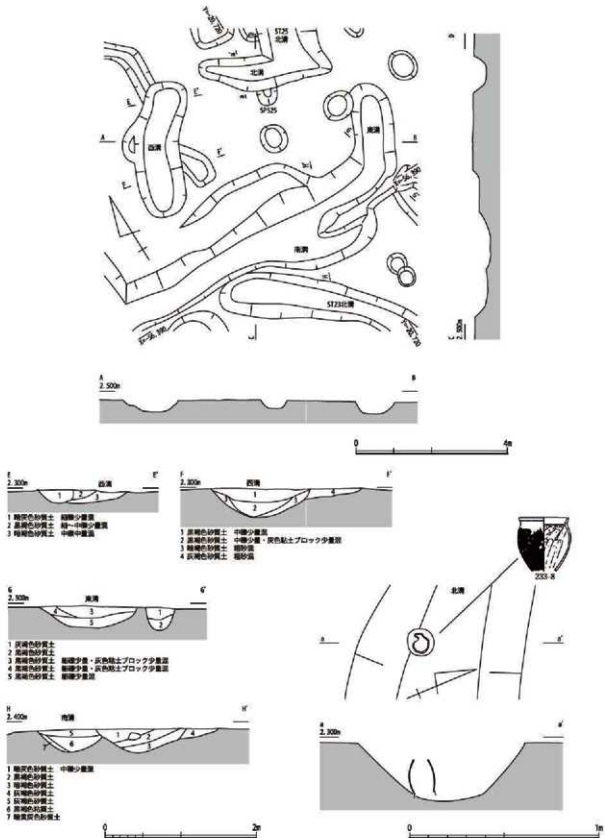


第131図 ST60土層断面・遺物出土状況図(縮尺1/50・1/20)

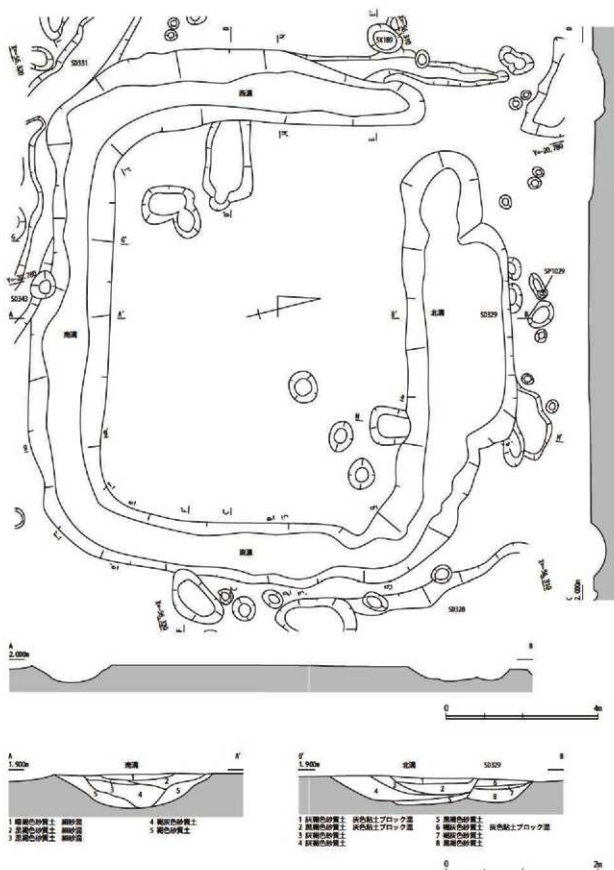


第132図 ST60埋葬施設実測図(縮尺1/30)

第1節 遺構

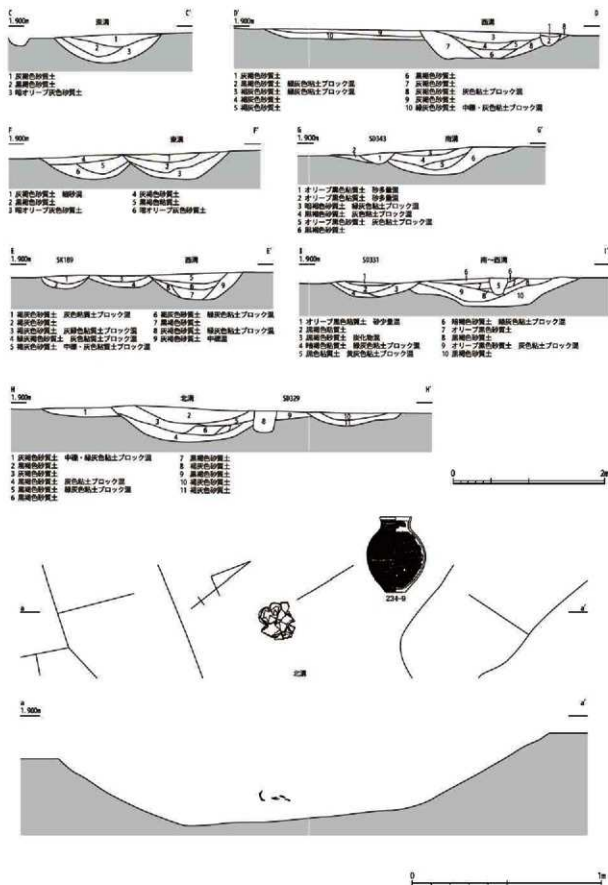


第133図 ST61実測図(縮尺1/100・1/50・1/20)

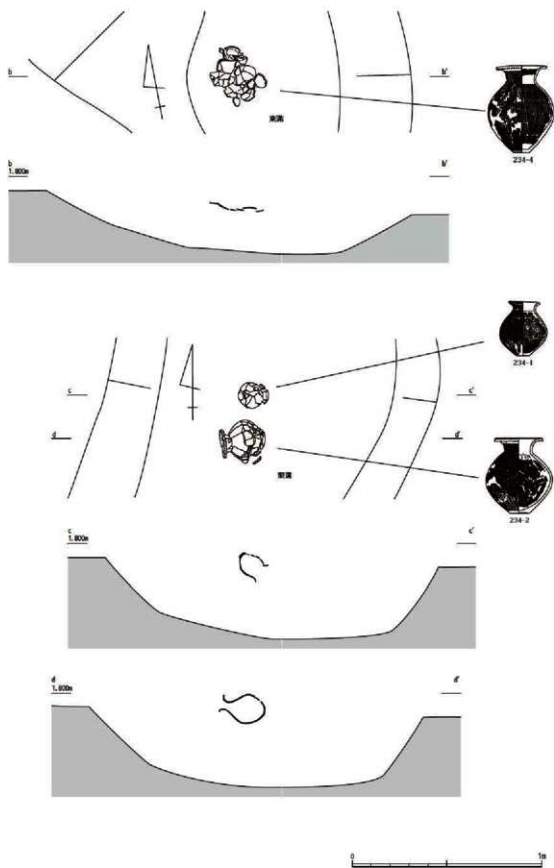


第134図 ST62全体・土層断面図(縮尺1/100・1/50)

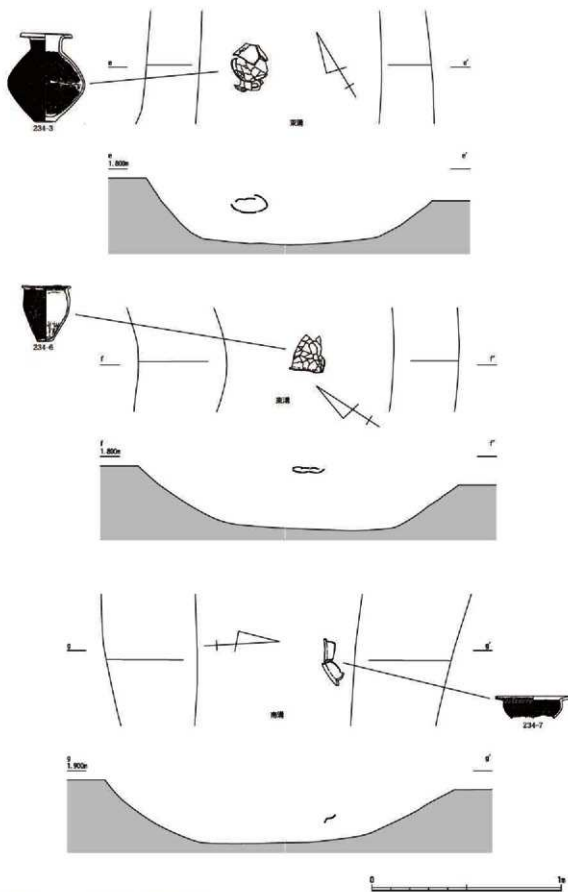
第1節 遺構



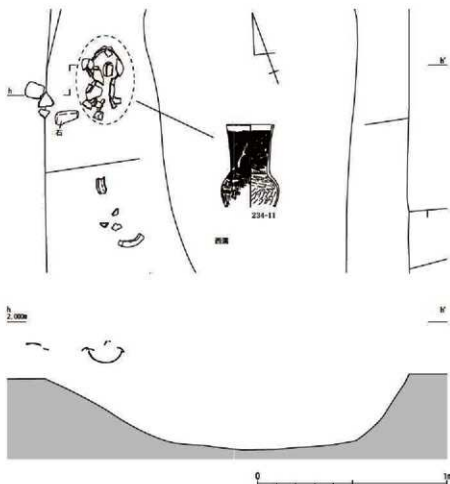
第135図 ST62土層断面・遺物出土状況図(縮尺1/50・1/20)



第136図 ST62遺物出土状況図(縮尺1/20)



第137図 ST62遺物出土状況図(縮尺1/20)



第138図 ST62遺物出土状況図(縮尺1/20)

2 土坑墓・木棺墓・土器棺墓

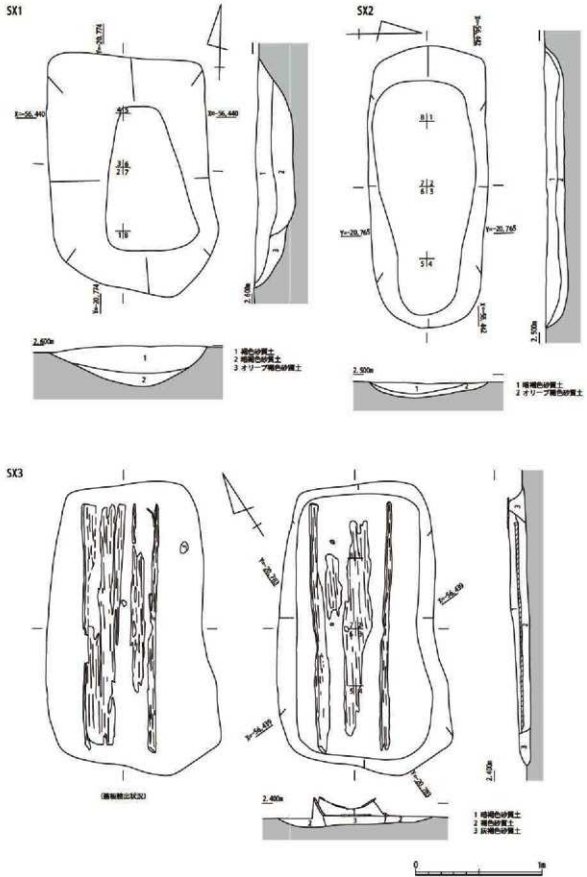
区画溝をもたない埋葬施設である。土坑墓・木棺墓22基および土器棺墓4基を認めた。前者については遺構プラン検出の段階で長方形の平面形をもつ土坑および木棺が露出していたものを埋葬施設と考え、SX1～50の記号番号を付して調査を行った。ただし、この作業は方形周溝墓の検出と同時並行で実施したため、結果的に半数以上を方形周溝墓の埋葬施設と認めることになり、それらの番号は欠番とした。また、一覧表(第3表)において、棺材の遺存、または堆積状況から木棺墓とみられるもの以外はすべて土坑墓と表記したが、痕跡を認め得なかつただけで、本来木棺を有していた土坑を含む可能性は否定できない。以下、個別に説明する。計測値などについては第3表を参照されたい。

1) 土坑墓・木棺墓

SX1(第139図) II区G17・18グリッド、方形周溝墓ST8の南に位置し、長軸をN0°にとる。横断面は船底状をなす。木棺の痕跡は認められない。遺物は土器の細片が少量出土したのみである。

SX2(第139図) II区F17グリッド、方形周溝墓ST9の西に位置し、長軸をN89°Wにとる。横断面は緩い弧状をなす。木棺の痕跡は認められない。遺物は土器の細片が少量出土したのみである。

SX3(第139図) II区H18グリッド、方形周溝墓ST20の南に位置し、長軸をN36°Eにとる。木棺墓であり、溝SD79を切って構築されている。木棺は組合式の箱形木棺で、底板・側板・蓋板を検出した。いずれも腐朽が著しい。樹種はスギと同定された。遺物は土器の細片が少量出土したのみである。



第139図 SX1・2・3実測図(縮尺1/30)

SX4 (第140図) II区F・G19グリッドに位置し、三方を方形周溝墓ST6・8・19に囲まれている。長軸方向はN77°Wである。横断面は緩い弧状をなす。木棺の痕跡および遺物は認められない。

SX5 (第141図) II区F19グリッド、SX4の東に位置し、長軸をN62°Eにとる。土層断面は木棺の痕跡を示しているようにみえるが、明瞭でない。底面は傾斜しており、凹凸もある。遺物は北東半の1・2層を中心に土器の小破片が出土している。

SX6 (第140図) II区F19グリッド、SX5の北東に位置し、長軸をN49°Eにとる。底面はほぼ平坦であるが、木棺の痕跡は認められない。遺物は土器の細片が少量出土したのみである。

SX7 (第140図) II区F19グリッド、SX6の北東に位置する。長軸をN70°Wにとり、北側に近接するSX50と並列した位置関係にある。掘形は箱形を呈し、棺材は遺存していなかったが、土層断面から木棺墓と推測される。遺物は、墓坑の中央部西寄り、底面付近を中心に84点におよぶガラス小玉(第290図1~81)が出土した。これらは副葬品もしくは被葬者の着用品と考えられるが、多くは底面からやや浮いた位置で上下にばらつきがあることから、もともと棺蓋上に置かれたものが棺材の腐朽によって棺内に落ち込んだ可能性が高い。また、東半の検出面直下では、弥生時代後期中葉に位置付けられる甕(第235図1)1個体の破片が、墓坑壁に沿うように散らばった状態で出土した。棺内に落ち込んだ様子が認められないことから、木棺上を避け、裏込土の上面に置かれたものと考えられる。

SX8 (第141図) II区F12グリッドに位置し、長軸をN48°Eにとる。木棺墓であり、方形周溝墓ST18の南溝を切って構築されている。木棺は組合式の箱形木棺で、底板・側板・小口板・蓋板が遺存していた。いずれもかなり腐朽が進んでいるが、底板上に小口板を置き、側板ではさみこ構造であることは確認できる。棺材の樹種はいずれもスギと同定された。遺物は土器の細片が主に棺内埋土から出土している。

SX9 (第142図) II区G12グリッド、周溝建物SH1の東に位置し、長軸をN75°Eにとる。木棺の痕跡は認められず、遺物は土器の細片が少量出土したのみである。

SX10 (第142図) II区E18グリッド、方形周溝墓ST9の北西、ST12の西に位置する。東側がトレンチで破壊されているが、正方形に近い平面形を呈すと考えられる。木棺の痕跡や遺物は認められない。

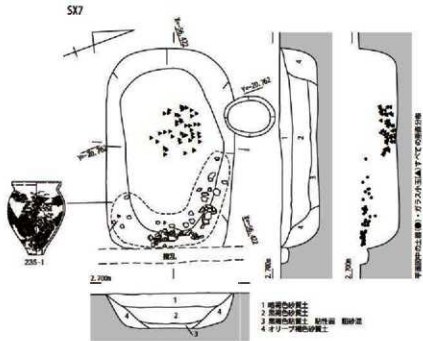
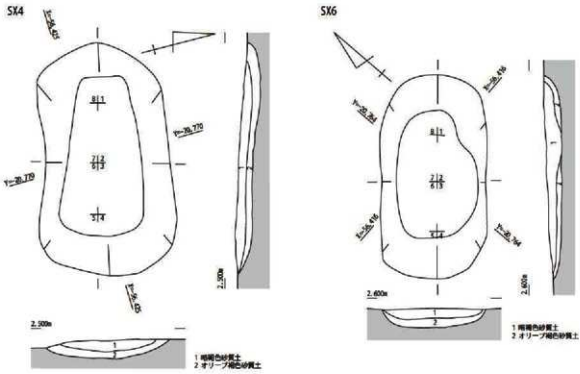
SX11 (第142図) II区F12グリッド、方形周溝墓ST18の南に位置し、長軸をN11°Eにとる。横断面は弧状をなす。木棺の痕跡は認められない。遺物は土器の細片が少量出土したのみである。

SX27 (第143図) IV・VII区A・B19グリッド、方形周溝墓ST17の東に位置し、長軸をN28°Eにとる。横断面は逆台形状を呈す。木棺の痕跡は認められない。遺物は中央部から北半にかけて弥生時代前期に属す土器(第235図2~7)やサヌカイト製の石鏃・剥片(第279図5・6・10)が出土した。

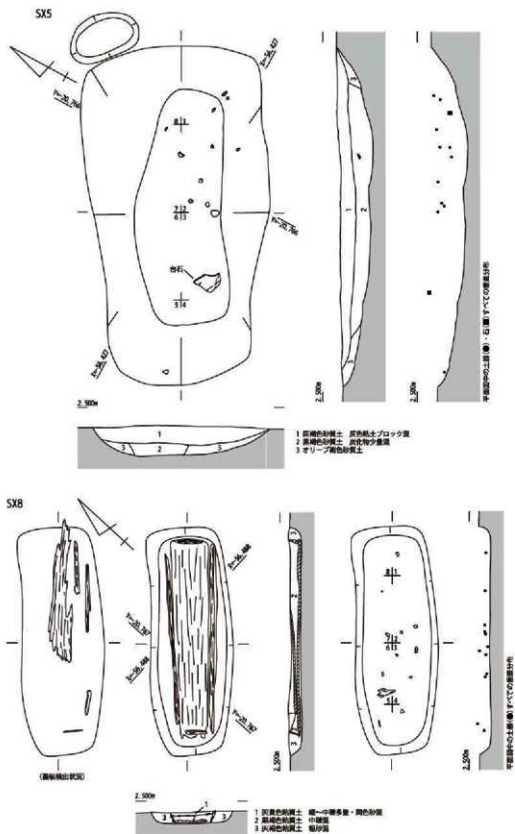
SX28・29 (第142図) IV区A19グリッド、SX27の北東に位置する。切り合い関係にあり、SX29がSX28を切っている。SX29は長軸をN54°Eにとり、横断面は弧状をなす。木棺の痕跡は認められない。遺物は北東半を中心に弥生時代前期および中期に位置付けられる土器(第235図8~12)が出土した。また、サヌカイト製の石鏃や剥片(第279図7・14)も出土している。SX28は長軸をN49°Eにとる。土器の細片と共にサヌカイト製の楔形石器(第279図9)や砕片が出土した。

SX30 (第143図) IV区C24グリッド、ST30・35の北に位置し、長軸をN15°Eにとる。横断面は逆台形状を呈す。木棺の痕跡は認められず、遺物は土器の細片が少量出土したのみである。なお、本遺構の北東に溝SD230、北西に溝SD248がV字状の配置をなしており、軸方向や位置関係から関連を考えるべきかもしれない。

第1節 遺構

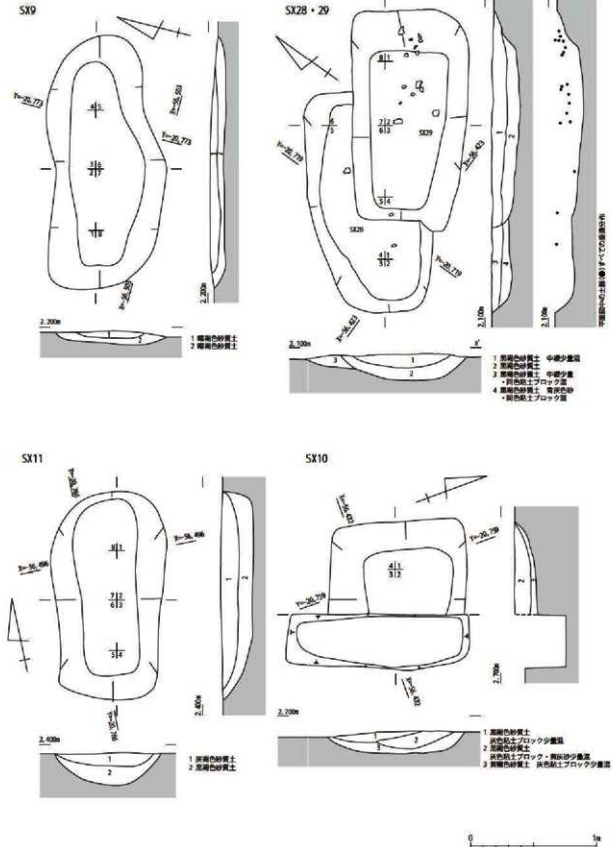


第140図 SX4・6・7実測図(縮尺1/30)

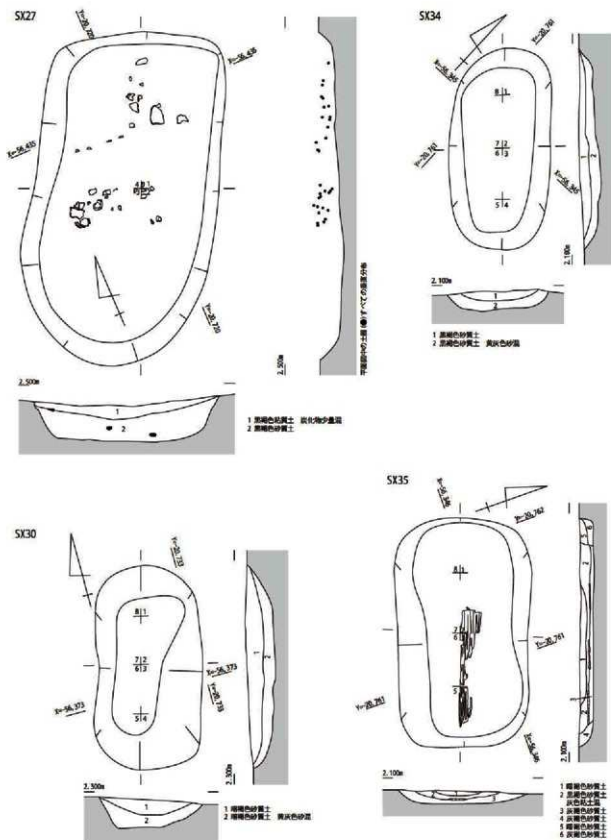


第141図 SX5・8実測図(縮尺1/30)

第1節 遺構



第142図 SX9・10・11・28・29実測図(縮尺1/30)



第143図 SX27・30・34・35実測図(縮尺1/30)

SX34 (第143図) IV区F27グリッド、方形周溝墓ST38の西に位置し、長軸をN42° Wにとる。横断面は逆台形状を呈す。木棺の痕跡は認められず、遺物は土器の細片が少量出土したのみである。

SX35 (第143図) IV区F27グリッド、SX34の南にほとんど接するように位置し、長軸をN70° Wにとる。木棺墓とみられ、腐朽した底板と考えられる板状の木材を検出した。遺物は土器の細片を少量出土したのみである。

SX37 (第144図) IV区F26グリッド、方形周溝墓ST39の西に位置し、長軸をN21° Eにとる。平面形は不整形で楕円形に近く、底面は東西に傾斜している。木棺の痕跡は認められず、遺物も出土していない。

SX38 (第144図) IV区F・G24グリッドに位置し、長軸をN68° Wにとる。横断面は逆台形状を呈す。木棺の痕跡は認められず、遺物も出土していない。

SX39 (第144図) IV区F24グリッド、方形周溝墓ST46の北に位置し、長軸をN11° Eにとる。木棺の痕跡は認められず、遺物も出土していない。

SX50 (第144図) II区F20グリッド、方形周溝墓ST19の東に位置する。II区北壁にかかって一部を検出したが、VII区に広がるはずの残り部分は確認できなかった。検出した範囲のみでの観察であるが、長軸をN70° Wにとり、溝SD140をはさんで南側に位置するSX7とはほぼ並列する位置関係にある。木棺の痕跡は認められず、遺物も出土していない。

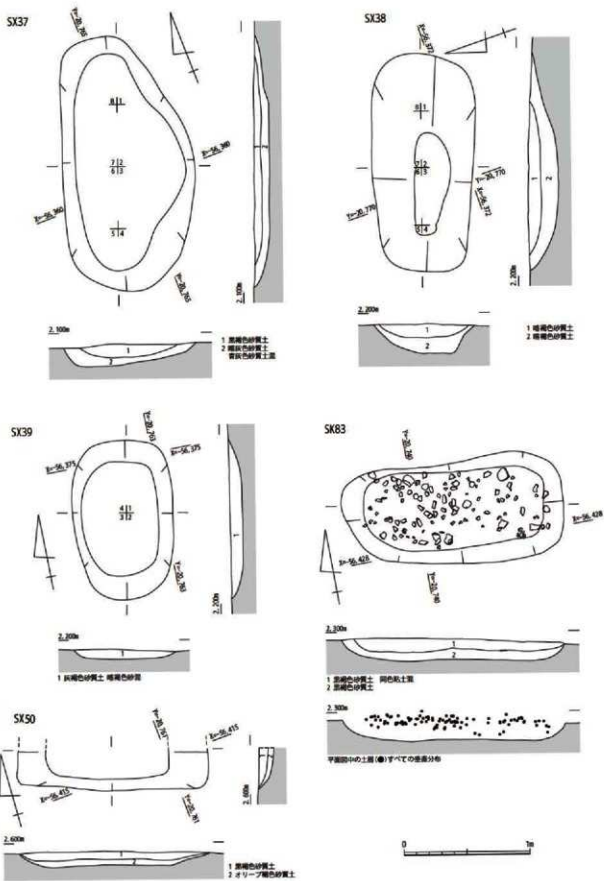
SK83 (第144図) II区C16グリッド、方形周溝墓ST13の墳丘南東隅に位置する。現地調査ではSKの記号番号を与えたが、平面形状が土坑墓とした遺構に類似し、遺物の出土状況も特異であるため、ここに含めた。長軸方向はN85° Wである。埋土は2層からなり、主に1層で土器の小破片が多数出土した(第240図1~10)。これらの破片はあまり接合せず、図化に耐えうるものは少ない。時期比定が可能な破片はすべて弥生時代前期に位置付けられる。

2) 土器棺墓

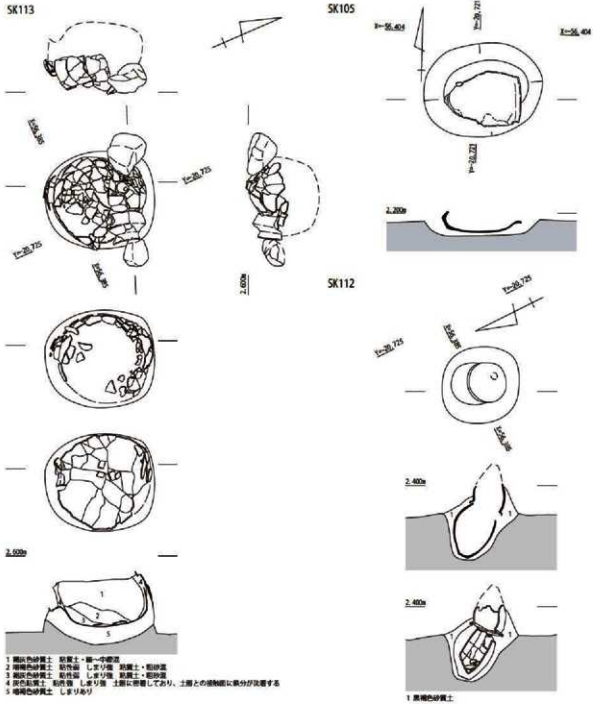
SK105 (第145図) IV区B21グリッド、方形周溝墓ST22の墳丘に位置する。弥生時代前期に比定される壺(第240図16)を棺身とし、横位に埋置されていた。棺長は約0.4mを測る。棺および掘形は大きく削平されており、棺蓋の有無は不明である。残存していた掘形は平面楕円形、断面皿状を呈し、長軸0.63m、短軸0.5m、深さ0.1mを測る。

SK112 (第145図) IV区B23グリッド、方形周溝墓ST30の南に位置する。弥生時代後期後葉に比定される2個体の壺(第242図)を合口で上下に組み合わせた土器棺墓である。棺長は組み合わせた状態で約0.5mを測る。土器棺が埋設された土坑は下半のみを検出した。掘形上部の南側の傾斜が北側に比べ緩くなっており、棺の傾きと対応することから、その方向でやや斜めに埋設されたと考えられる。

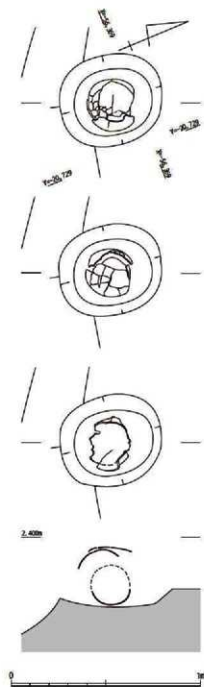
SK113 (第145図) IV区B23グリッド、SK112の南東に近接して位置する。古墳時代前期中葉に属する3個体の土器を組み合わせた土器棺墓である。包含層(V層)の掘削中に検出した。棺の上面を確認した段階で周囲の精査を徹底的に行ったが、掘形の平面プランを明確に捉えることができず、徐々に掘り下げた結果、最終的に方形周溝墓などの検出面近くまで達し、完全に棺体が露出した状態で調査を実施することになった。棺身となるのは、口縁が打ち欠かれた大型壺(第243図3)であり、横位に据えられている。その胴下部の上に口頸部を欠失する中型の壺(同図2)が被せられ、さらに別個体である大型壺の口頸部(同図1)がその横に添えられる。また、棺身の打ち欠かれた口の部分は同図2の肩部の破片で覆われていた。土器棺の掘形については、上述のような経緯から底面のみを確認した。棺身は



第144図 SX37・38・39・50・SK83実測図(縮尺1/30)



第145図 SK105・112・113実測図(縮尺1/20)



第146図 SK116実測図(縮尺1/20)

SB2 (第147図) I区K・L2・3グリッド、SB1の北西に位置する。長辺3間、短辺2間で、長軸をN41°Eにとる。長辺の柱間は両側が狭く、中央が広く設けられている。SP129はこの建物に伴うものかどうか不明である。SP129・130・256には板状の柱根が遺存していた。長辺と直交するように据えられたとみられる。

SB3 (第148図) I区K3グリッドに位置し、SB1の南に接する。正方形に近い平面形を呈し、柱間は長辺2間、短辺1間である。長軸をN35°Eにとる。SP116には柱根が遺存していた。SP217は建て替えに伴う柱穴の可能性がある。

底面との間に1層挟んで据えられていた。また、土器棺の上面と同レベルで大振りの亜角礫3個が棺身の底部側を囲むように出土している。標石の可能性もある。

なお、このSK113およびSK112の東側にL字状の溝が認められ、関連を考えるべきかもしれない。

SK116 (第146図) IV区B25グリッド、方形周溝墓ST36の東に位置する。弥生時代中期後葉に属する2個体の土器を組み合わせた土器棺墓である。大型の甕(第244図2)を横位に据え棺身とし、その上を分割した大型壺の体部(同図1)で二重に覆っている。

4 掘立柱建物・柱列

ここで報告するのは掘立柱建物69棟、柱列4基である。確認した順に記号番号を付したが、遺構プラン検出時点で認識したものと、遺構完掘後、さらには整理作業時に図面上で認めたものがあるため、連続する記号番号でも調査区を前後する場合が多々ある。

遺構全体の分布状況としては、調査範囲の北西部および南部に集中し、方形周溝墓群とは一部重複も認められるものの主たる分布域を明瞭に違えている。

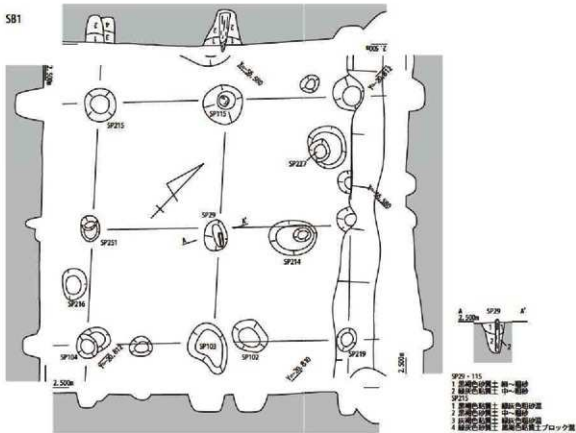
また、掘立柱建物を構成する柱穴では数多くの柱根が遺存しており、可能なものについて年輪年代測定および¹⁴C年代測定を実施した。詳細については第5章を参照されたい。

以下、個別に説明する。計測値は第4表に記載した。

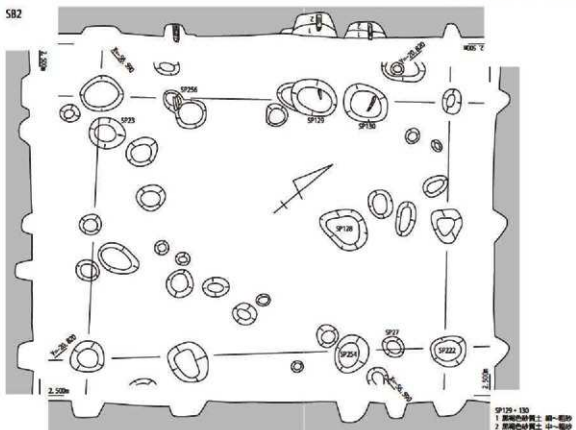
1) 掘立柱建物

SB1 (第147図) I区K3・4グリッド、調査区の南端に位置する総柱建物である。長辺・短辺の差が小さく、正方形に近い平面形を呈す。柱間は各辺2間で、長軸をN46°Eにとる。北東側を溝SD22が長軸に直交するように走っており、溝の幅からすれば、さらに1間分広がる可能性がある。SP29とSP115には柱根が遺存していた。SP29の柱根は板状で、長軸と直交するように据えられたとみられる。

SB1



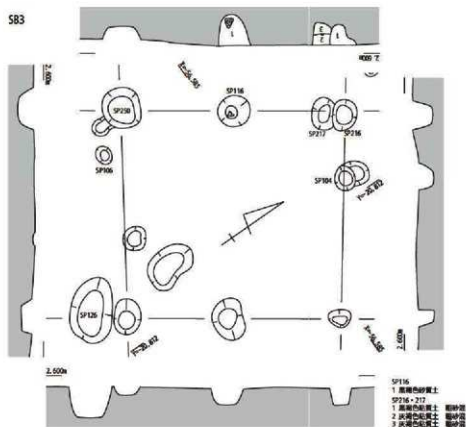
SB2



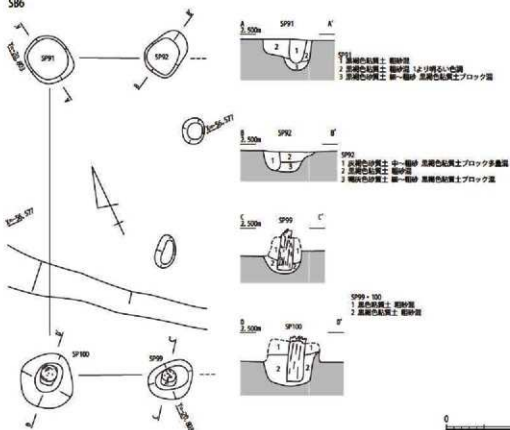
第147図 SB1・2実測図(縮尺1/50)



SB3



SB6



第148図 SB3・6実測図(縮尺1/50)

SB4・8・9 (第150図) I区I・J5グリッドに位置する建物群である。長軸方向をほぼ同じくし、切り合い関係をもつ。これら3棟の関係をみると、まず、SB4とSB8の2棟は全体的に重複している。SB4の平面規模がSB8より一回り大きく、SB8の側柱はSB4の内側にほぼ収まる。両者の西辺柱列は切り合っており、SB4がSB8を切っていることが確認できる。一方、SB9はSB4の西辺に接し、後述するように東辺をSB4に切られていると推測される。以下、個別に説明する。

SB4は柱間が長辺4間、短辺1間で、長軸をN32°Eにとる。東隅が調査区外にかかり、その範囲の柱穴は確認していない。検出した柱穴の多くには礎板が遺存していた。また、南隅の柱穴SP192は、後述するSB7を構成する柱穴でもあるが、SB7の残るすべての柱穴に柱根が遺存していたのに対してSP192では柱根の痕跡が認められないことから、SB4が後出する建物であり、その構築の際に柱が抜き取られたと考えている。遺物ではSP35から弥生時代後期の土器が出土している。

SB8は柱間が長辺4間、短辺1間で、長軸をN28°Eにとる。柱間距離は不均等で、南側の1間が著しく狭い。また、長軸の延長上には独立棟持柱の柱穴と考えられるピットが認められる。多くの柱穴では礎板が遺存しており、細長い形状のものが特徴的にみられる。SP63の礎板の中央部はくびれており、柱との組み合わせ方に関係する可能性がある。なお、SP30の礎板は年輪年代測定で72B.C.(推定伐採年代32B.C.+a)の値が示されている。

SB9は柱間が長辺3間、北側短辺1間、南側短辺2間で、長軸をN34°Eにとる。南～西辺の柱列では柱根を検出した。いずれも円柱で、礎板は用いられていない。一方、東辺には西辺の柱列に対応する位置に柱穴が認められるものの、柱根は遺存しておらず、SB4に帰属すると考えた。SB7の場合と同じく、SB4の構築に際して、時間的に先行するSB9の柱が抜き取られ、残った掘形が再掘削・利用されたと推測している。

SB5 (第149図) I区K4、L3・4グリッド、SB1～3の北西に位置する。長辺4間、短辺1間で、長軸をN21°Eにとる。東辺の柱穴1基は土坑SK35に重複するとみられ、確認できなかった。

SB6 (第148図) I区J4グリッドに位置し、大半が調査区外へ延びている。4基の柱穴を検出した。SP99・100には柱根が良好に遺存していたほか、SP91・92の埋土にも柱の痕跡が認められる。遺存していた柱根はいずれも断面円形で、SP99の柱根(第302図5)は下部側面に方形の貫通孔をもつ。

SB7 (第151図) I区I・J4・5グリッド、SB6の北に位置し、SB8と柱穴1基が重複する。正方形に近い平面形を呈し、柱間は各辺2間、長軸方向はN64°Eである。東辺と西辺では柱配置がずれている。SP192を除く7基の柱穴で柱根を検出した。いずれの柱根も断面円形のものである。SP192については、前述のように、SB8構築の際に柱が抜き取られ、掘形を再掘削・利用されたものと考えている。

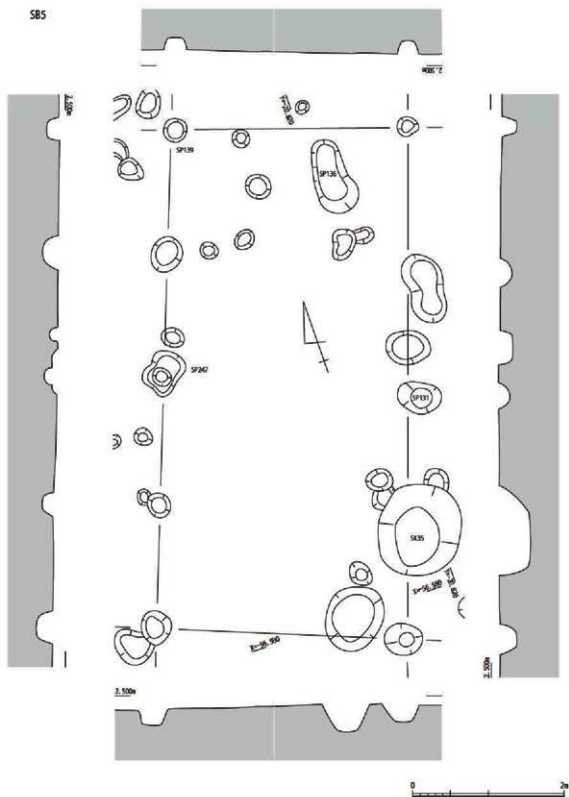
SB10 (第151図) I区I・J9グリッドに位置し、SB11と一部重複する。柱間は長辺3間、短辺1間で、長軸方向をN80°Wにとる。

SB11 (第152図) I区I・J9グリッドに位置し、SB10と重複する。柱間は各辺1間で、正方形に近い平面形を呈す。長軸方向はN17°Eで、SB10とはほぼ直交する。SB10とは図面上共有しているSP263で切り合い関係があったと想定されるが、現地調査では確認できず、新旧関係は不明である。

SB12 (第153図) I区J9グリッド、SB10・11の西に近接して位置する。長辺2間、短辺1間で、正方形に近い平面形を呈す。長軸をN52°Wにとる。

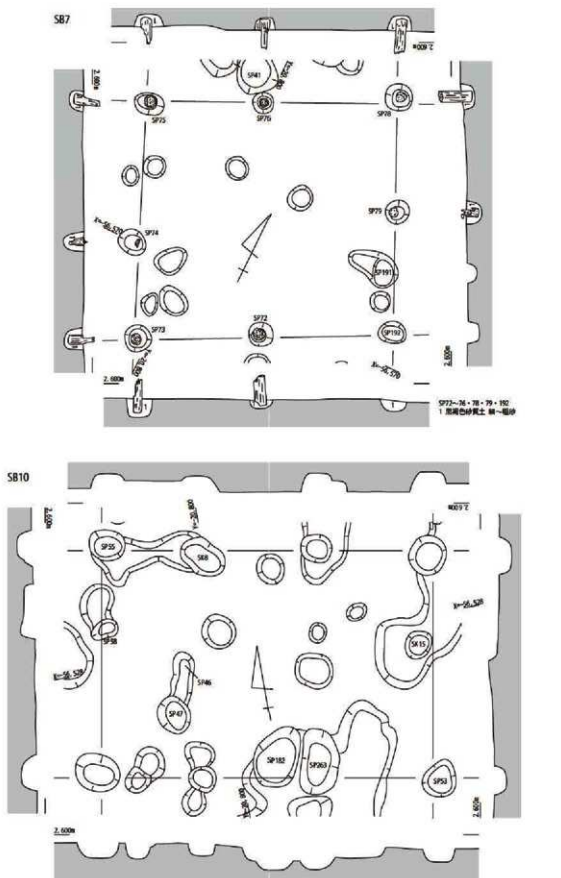
SB13 (第152図) I区K6グリッドに位置する。柱間は各辺1間で、正方形に近い平面形を呈す。長軸方向はN10°Eである。西辺の柱穴SP147・148には礎板が遺存していた。

S85

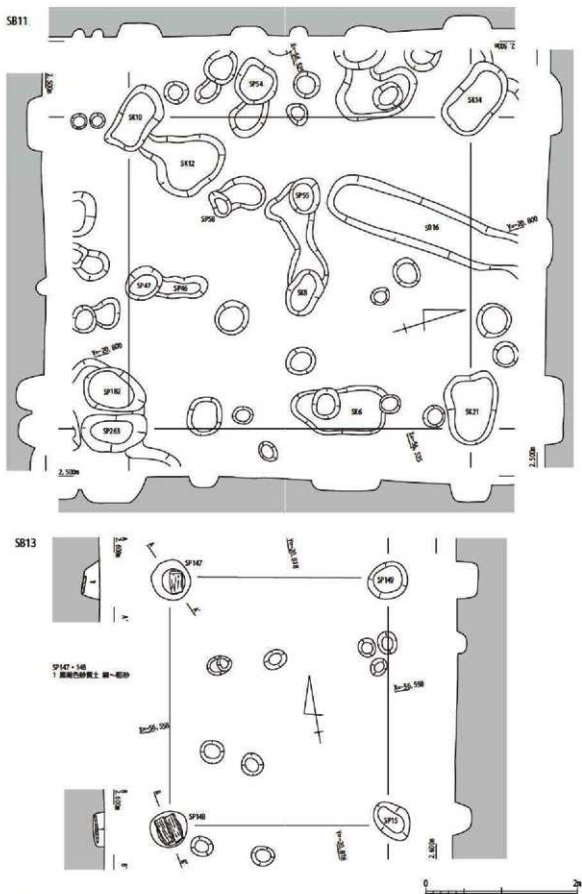


第149図 SB5実測図(縮尺1/50)

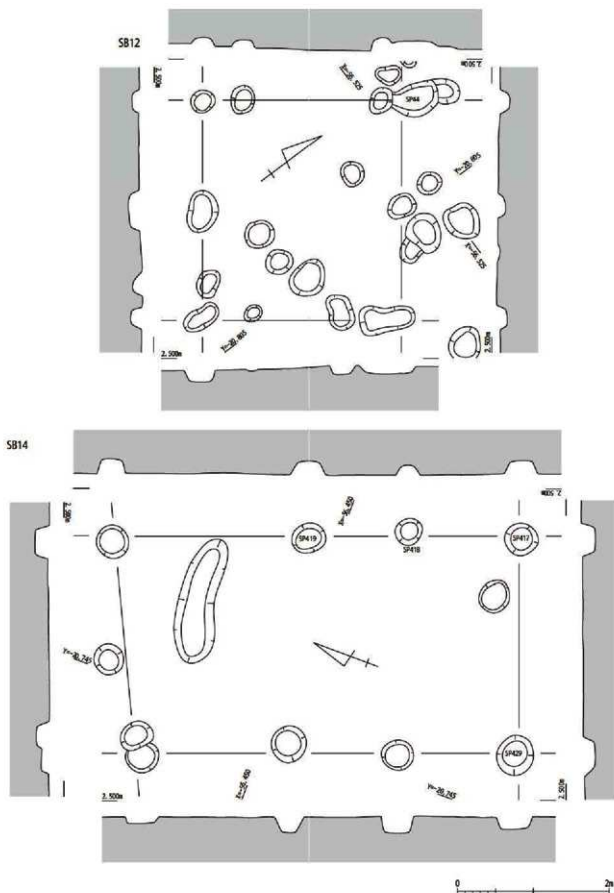
第1節 遺構



第151図 SB7・10実測図(縮尺1/50)



第152図 SB11・13実測図(縮尺1/50)



第153図 SB12・14実測図(縮尺1/50)